

盛岡市内遺跡群

— 平成 24・25 年度発掘調査報告書 —

台太郎遺跡 第 78・79 次

大宮北遺跡 第 17 次

2014. 9

盛岡市教育委員会

盛岡市内遺跡群

— 平成 24・25 年度発掘調査報告書 —

台太郎遺跡 第 78・79 次

大宮北遺跡 第 17 次

2014. 9

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する奥羽山脈と北上山地から流れ出る雫石川・中津川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約30万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には旧石器時代から江戸時代まで、786箇所の遺跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく遺跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建築にともなう調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解く上で、大変貴重な成果をあげております。

本書は、平成24・25年度に実施した市内遺跡群の発掘調査の報告書であります。市民の皆様の地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大なるご指導やご助言を賜りました文化庁文化財部記念物課ならびに岩手県教育委員会生涯学習文化課に対して、深く感謝を申し上げますとともに、発掘調査にご理解とご協力を頂いた地権者各位ならびに地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成26年9月

盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一

例 言

1. 本書は、平成 24・25 年度国庫補助事業「盛岡市内遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書は遺構及び遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集は花井正香、佐々木紀子、津嶋知弘が担当し、千田和文、室野秀文、菊地幸裕、鈴木俊輝が協力した。
3. 遺構の平面位置は、日本測地系を用い、平面直角座標 X 系を座標変換した調査座標で表示した。
台太郎遺跡 調査座標原点 $X - 35,500.000$ $Y + 26,500.000$ = $R X \pm 0.000$ $R Y \pm 0.000$
大宮北遺跡 調査座標原点 $X - 35,000.000$ $Y + 23,700.000$ = $R X \pm 0.000$ $R Y \pm 0.000$
4. 高さは標高値をそのまま使用している。
5. 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（2013 小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業(株)発行）を参考にした。
6. 遺構の名称及び記号は次のとおりである。また「竪穴建物跡」の名称については、『発掘調査のてびき - 集落遺跡発掘編 -』（2010 文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編集）に倣っている。

遺 構	記号	遺 構	記号	遺 構	記号
竪穴建物跡	R A	土 坑	R D	そ の 他	R Z
建 物 跡	R B	溝跡・堀跡	R G		

7. 遺構番号は、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、「県埋文センター」という。）調査遺構番号との整合を図り、以下のとおりとした。
本調査精査遺構：3 桁または 4 桁の遺跡内連続番号
（基本的に県埋文センター調査遺構番号に連続、一部欠番あり）
8. 使用した地図は国土交通省国土地理院発行の 5 万分の 1「盛岡」「日詰」の地形図である。
9. 土器の区分は、須恵器・あかやき土器・土師器に分類した。「あかやき土器」の名称は、ロクロ使用の酸化煙焼成土器（坏類、甕類）に使用し、ロクロ使用の内面黒色処理の坏類は「土師器」に分類した。
10. 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。

11. 調査体制 -平成 24・25 年度-

[調査主体] 盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一
教育部長 佐藤 義見 (～24年度)
鷹鷲 徹 (25年度～)
教育次長 柴田 道明

[調査総括] 歴史文化課 遺跡の学び館

課長兼館長 田山 浩充 (～24年度)
袖上 寛 (25年度～)

主幹兼館長補佐 千田 和文

[調査]

文化財主査 室野 秀文
文化財主査 菊地 幸裕 (25年度～)
文化財主査 津嶋 知弘 ※資料整理
文化財主査 神原雄一郎 (大船渡市派遣)
文化財主任 花井 正香 ※調査・資料整理
文化財主任 佐々木亮二 (～24年度)
文化財調査員 佐々木紀子 (～25年度) ※資料整理
文化財調査員 鈴木 俊輝 (25年度～)

[管理・学芸]

主査 吉田 尚 (24年度)
主査 田山 淳一 (25年度～)
主任 江本 敦史
学芸調査員 山岸 佳澄
文化財調査員 木幡 里美
学芸調査員 山野 友海

[発掘調査・室内整理作業]

阿部有子, 天沼芳子, 泉山紀代子, 伊藤敬子, 内山陽子, 長内理恵, 及川京子, 川村久美子, 熊谷あさ子, 小林勢子, 小松愛子, 佐藤和子, 佐藤公一, 佐藤美智子, 佐野光代, 竹花栄子, 谷藤貴子, 千葉智子, 千葉留里子, 樋口泰子, 日野杉節子, 細田幸美, 村上幸子, 村上美香, 山田聖子

[地権者・調査協力]

藤澤修, 中井修一, 菅原善正, 井上祐子, 岩手県教育委員会, 公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

[発掘調査に係る業務委託]

株式会社タックエンジニアリング (土器実測)

(五十音順, 敬称略)

目 次

序 言	
例 言	
目 次	
表 目 次	
挿 図 目 次	
写真図版目次	

I. 平成24・25年度発掘調査の概要	1
II. 台太郎遺跡（第78・79次調査）	5
III. 大宮北遺跡（第17次調査）	23

写 真 図 版	
報 告 書 抄 録	

表 目 次

第1表 平成24年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第2表 平成25年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第3表 台太郎遺跡調査成果一覧	8
第4表 大宮北遺跡調査成果一覧	24

挿 図 目 次

第1図	地形分類と周辺の遺跡分布	3
第2図	台太郎遺跡の位置 (1:50,000)	5
第3図	台太郎遺跡全体図 (1:2,000)	9
第4図	台太郎遺跡第78・79次調査全体図	12
第5図	R D2184土坑, R G005堀跡・R G615溝跡	15
第6図	R G005堀跡出土土器	16
第7図	R A670 竪穴建物跡, R D2185土坑	19
第8図	ピット土層断面, R A670竪穴建物跡出土土器 (1)	20
第9図	R A670 竪穴建物跡出土土器 (2)	21
第10図	大宮北遺跡の位置 (1:50,000)	23
第11図	大宮北遺跡全体図 (1:2,000)	25
第12図	大宮北遺跡第17次調査全体図	27
第13図	R B008・009・010掘立柱建物跡, R B010掘立柱建物跡出土土器	29
第14図	R D069~072土坑, R Z 002 土器廃棄遺構	33
第15図	R D073~076土坑, R G 016・017溝跡	35
第16図	ピット土層断面, R D070土坑, R G016・017溝跡, R Z002土器廃棄遺構 (1) 出土土器	37
第17図	R Z002土器廃棄遺構 (2), ピット, 遺構外出土土器	39

写 真 図 版

第1図版	台太郎遺跡第78次調査区全景
第2図版	台太郎遺跡第78次調査R G005堀跡土層断面, R G005堀跡出土土器器球胴甕
第3図版	台太郎遺跡第79次調査区全景
第4図版	台太郎遺跡第79次調査R A670竪穴建物跡全景, R A670竪穴建物跡出土土器
第5図版	大宮北遺跡第17次調査区全景, R B010掘立柱建物跡全景
第6図版	大宮北遺跡第17次調査R Z002土器廃棄遺構全景, R Z002土器廃棄遺構出土土器

《遺物の表現について》

(1) 土器

- a. 出土土器の区分は、須恵器・あかやき土器・土師器に大別した。
- b. 土器の実測図・拓本は1/3スケールとした。
- c. 挿図の土器配列については、器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
- d. 土師器の黒色処理されたものは、網目（スクリーントーン）で表現した。

(2) 挿図中の記号・番号は遺物の出土位置及び出土層位を表している。

(例) RA 871 C層 → RA 871 竪穴建物跡内埋土C層より出土

(例) G 2 - W 5 IV層

↓ ↓ ↓

※1 ※2 ※3

- ※1 調査座標原点 $R X \pm 0$ $R Y \pm 0$ を起点として、 $X \cdot Y$ 両軸を50m毎に区切る大グリッドを設定し、 X 軸線上を西から東へ $A \cdot B \cdot C \cdots W \cdot X \cdot Y$ (東から西への場合は $-A \cdot -B \cdot -C \cdots -W \cdot -X \cdot -Y$)、 Y 軸線上を北から南へ $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdots 23 \cdot 24 \cdot 25$ (南から北への場合は $-1 \cdot -2 \cdot -3 \cdots -23 \cdot -24 \cdot -25$) と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組合せを、大グリッドと呼称した(第3・4図)。
- ※2 大グリッドを2m毎に細分割し、小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって、大グリッド-小グリッドという組合せで、遺物の平面出土地点を2mごとに表示した。
- ※3 遺物の出土層位を表している。

《遺構の表現について》

遺構の挿図中、説明する当該遺構については、実線で表現した。なお説明遺構と切り合った遺構については一点鎖線で表現した。

I 平成 24・25 年度発掘調査の概要

1 平成 24 年度事業の概要

市内遺跡群 盛岡市内には、現在 786 箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。近年では周知の遺跡内における大規模公共事業（区画整理、道路等）、各種民間開発、個人住宅建築等の土地開発にともなう事前の発掘調査や試掘調査を毎年 30 件前後実施している。平成 24 年度は発掘調査・試掘調査（公共事業・各種民間開発・個人住宅等）をあわせて 22 件実施した。

発掘調査 平成 24 年度の国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、試掘調査 5 件である（第 1 表）。町田遺跡第 19 次調査は平安時代の竪穴建物跡が確認され、翌年度に本調査を実施（市費）、平安時代の竪穴建物跡 2 棟などが確認された上畑遺跡第 11 次調査は、土地所有者の協力により遺構保存措置を図った。上記以外は遺構・遺物は確認されなかったため、第 1 表に所在地・調査期間・調査面積を示すのみとした。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	調査面積	調査原因
百目木遺跡(第34次)	盛岡市三本柳 5 地割35-11	12. 08. 01	29㎡	個人住宅建築
小屋塚遺跡(第39次)	盛岡市大新町167-11・14	12. 08. 09	13㎡	個人住宅建築
稲荷町遺跡(第29次)	盛岡市大館町242-11	12. 08. 23	17㎡	個人住宅建築
町 田 遺 跡(第19次)	盛岡市乙部30地割 51- 1	12. 11. 28	20㎡	個人住宅建築
上 畑 遺 跡(第11次)	盛岡市西見前11地割208- 1・4	12. 12. 10	20㎡	個人住宅建築

第 1 表 平成 24 年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

2 平成 25 年度事業の概要

市内遺跡群 平成 25 年度は、発掘調査・試掘調査をあわせて 18 件実施した（学術調査・現状変更除く）。

発掘調査 このうち国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、本調査 3 件、試掘調査 1 件の計 4 件である（第 2 表）。本調査は台太郎遺跡第 78・79 次調査、大宮北遺跡第 17 次調査で、試掘調査の小山遺跡第 36 次調査は遺構・遺物が確認されなかったため、第 2 表に所在地・調査期間・調査面積を示すのみとした。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	調査面積	調査原因
台太郎遺跡(第78次)	盛岡市向中野二丁目 3-11	13. 06. 12~21 13. 07. 04~24	55㎡	個人住宅建築
台太郎遺跡(第79次)	盛岡市向中野二丁目 3-3	13. 06. 12~21 13. 07. 04~24	67㎡	個人住宅建築
大宮北遺跡(第17次)	盛岡市本宮字小幡 4-1 の一部	13. 06. 24 13. 07. 03	119㎡	個人住宅建築 及び擁壁工事
小 山 遺 跡(第36次)	盛岡市東中野町26-4	13. 06. 28	27㎡	個人住宅建築

第 2 表 平成 25 年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

3 盛岡の地形・地質

盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山(2,038m)を望む。中央の北上平野には東北一の大川である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地形・地質に大きく影響を及ぼしている。

北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、地質構造上、古生代や中生代の堆積岩および花崗岩からなる。北上山地はその主要な境界である早池峰構造帯により、北部北上山地と南部北上山地に区分される。盛岡市東部は早池峰構造帯の西縁にあたる。これらの山地縁辺には、中津川・築川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。

盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。

築川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山(1,103m)の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道(宮古街道)に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。奥羽山脈より東流する雫石川は、雫石盆地を形成し盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、北上平野に流れ込む。雫石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なる。

雫石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物を基盤とした火山灰砂台地(滝沢台地)が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢村北部まで広範囲に及んでいる。

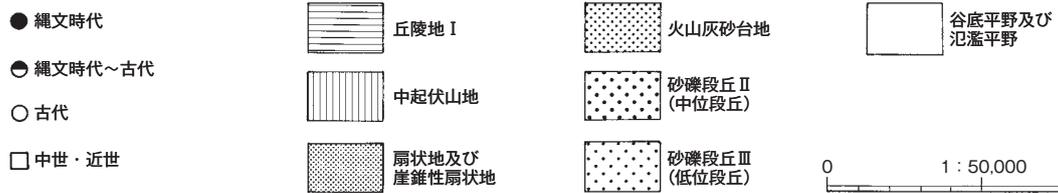
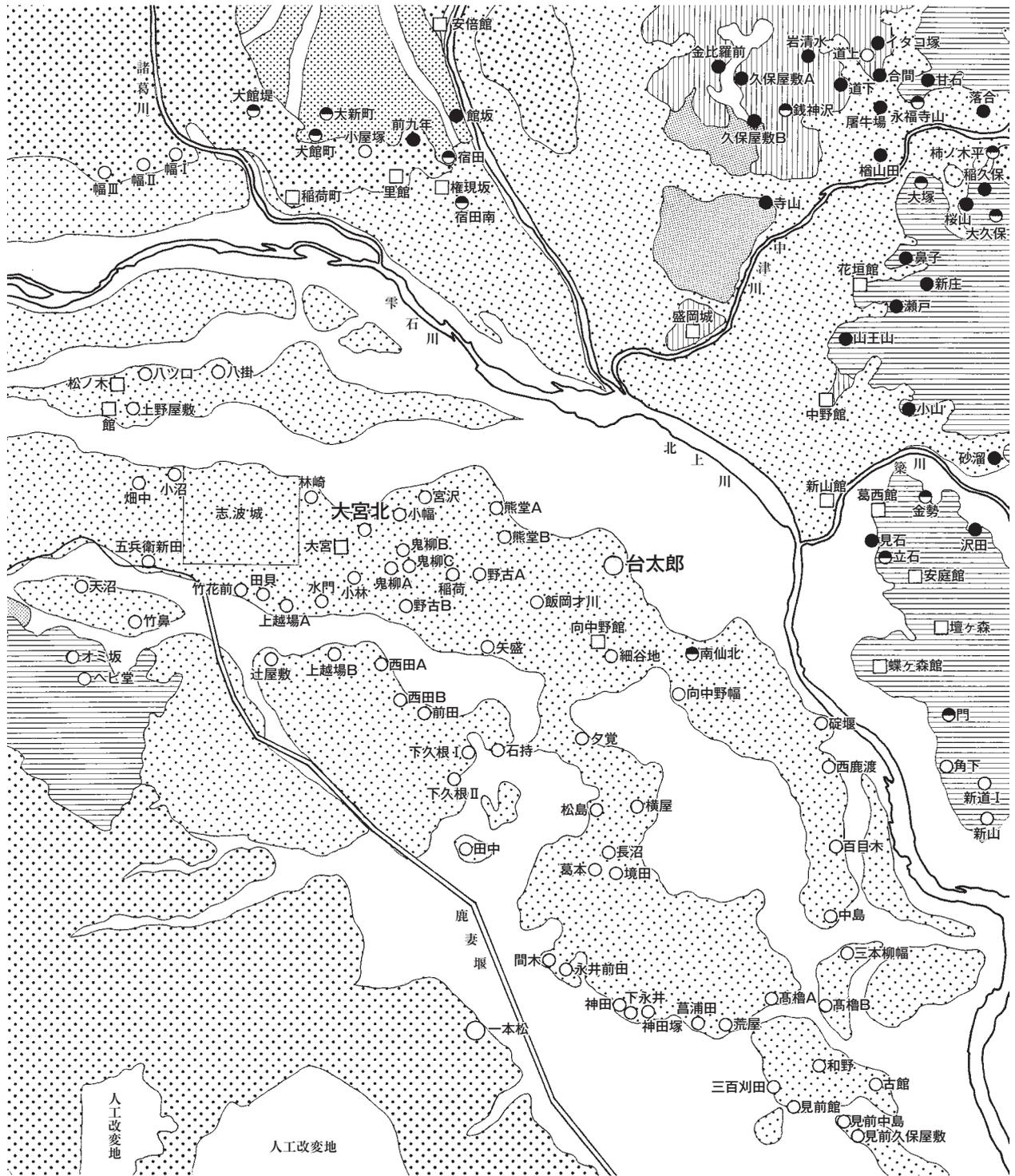
雫石川南岸は、雫石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。その規模は東西約8.0km、南北3.5kmで、段丘上からは主に古代から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。現在は宅地造成や圃場整備が進み、旧地形を留めているところは少ないが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる。

4 歴史的環境

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、市街地から北東へ約11kmの玉山区藪川字外山に小石川遺跡が所在する。山間部の小河川に臨む台地上にあり、後期旧石器時代の遺跡で木葉形尖頭器や石核、剥片、台石などが出土している。また、対岸には細石刃や石核の採集された大橋遺跡がある。

縄文時代 滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡からは、草創期の「爪形文土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の3遺跡以外にも大館堤・館坂・前九年遺跡などで早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期である。しかし、盛岡周辺に限っては北上山地内に散見するのみで遺跡の数は少ない。これは、約6,000年前に起こった岩手山の山体崩壊による自然災害の影響が関連していると考えられている。



第1図 地形分類と周辺の遺跡分布

縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加し、雫石川南岸の沖積平野を除く、広い地域に分布する。繫V・大館町・柿ノ木平・川目C遺跡など、主要河川の流域に大規模な拠点集落が営まれるようになる。

後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿ノ木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落、萩内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。

弥生～古墳 弥生時代の遺跡数は少ないが、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡で前期（砂沢式期）や終末期（赤穴式期）の土器を伴う竪穴建物跡が確認されている。古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で北海道系の形態をもつ土坑墓群が検出されている。永福寺山遺跡では後北C2-D式土器と古式土師器が共伴し、薬師社脇遺跡では古式土師器が埋納されていた。

古 代 古墳時代終末から奈良時代にかけて、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、野古A遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803年に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であると同時に、北方地域との結節点でもあったが、雫石川の水害を理由に、813年～814年に徳丹城（矢巾町）へ移転している。その後9世紀中ごろより、陸奥北部の経営は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幅遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。同様の建物跡は堰根遺跡でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子が見えてくる。この時期の集落は沖積面だけではなく、上猪去・猪去館・新道Ⅱ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面にも拡がりをみせる。

10世紀後半から12世紀までの遺跡は非常に少ないが、大新町遺跡や上堂頭遺跡、高松神社裏遺跡では10世紀後半頃の掘立柱建物や竪穴跡と土器が出土している。

12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は落合遺跡や堰根遺跡、稲荷町遺跡などで確認されている。また、奥州藤原氏の影響下にあったと考えられる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑窯産の大甕が出土しているほか、湯壺経塚からは常滑の三筋文壺、一本松経塚からは渥美窯産の壺が発見されている。大宮遺跡では大溝から12～13世紀のかわらけが出土している。

中 世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のもと考えられている。これらの城館跡は丘陵や山頂など見晴らしい場所だけでなく、平野部の微高地などにも多数築かれている。現在の盛岡城の場所には南部氏の家臣であった福士氏が築いた北館（慶善館）、南館（淡路館）からなる不來方城が存在した。

近 世 現在の城下の町並みの形成は、その南部氏の盛岡城築城から始まる。九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不來方城において、この不來方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『祐清私記』）。その後、慶長3年（1598）より盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。

Ⅱ 台太郎遺跡（第78・79次調査）

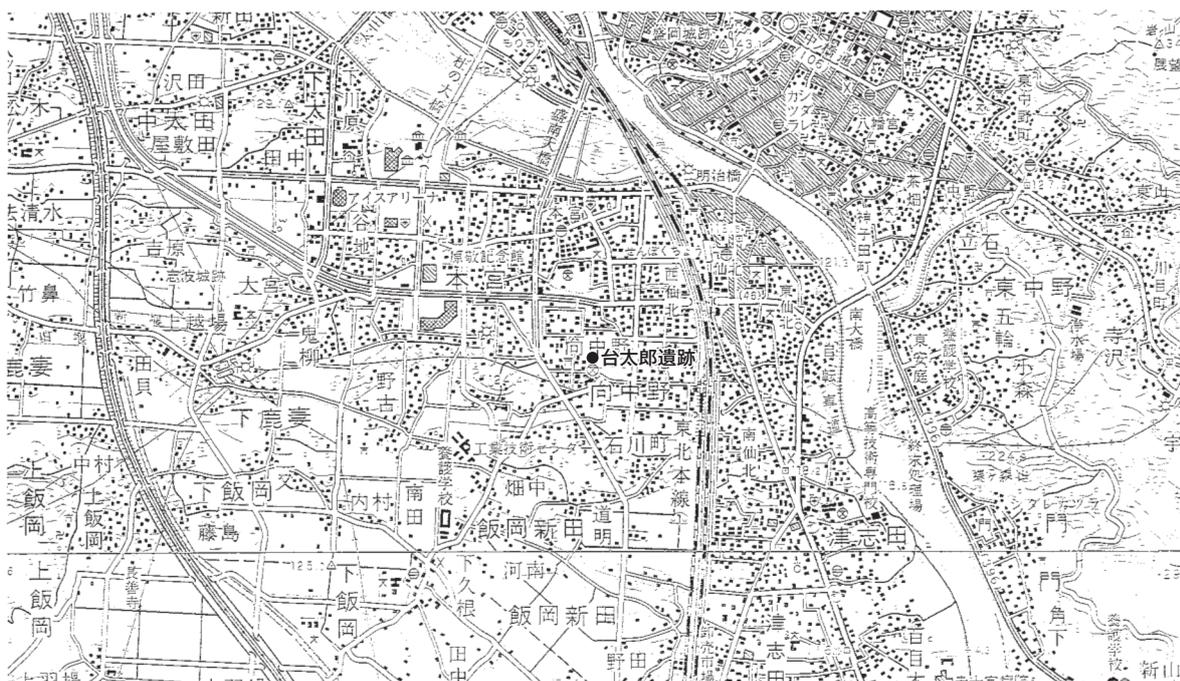
1. 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 台太郎遺跡は、JR盛岡駅より南東約2.1kmの向中野地内に所在する（第2図）。かつては水田・畑・宅地などの農地が主体を占めていたが、近年は盛岡南新都市開発整備事業（以下、「盛南開発」という。）に係る土地区画整理事業のため、急速に宅地化が進められている。遺跡の範囲は東西約800m、南北約500mと推定され、標高は119～123mである。現況は宅地、学校及び商業地である（第3図）。

地形・地質 雫石川は奥羽山脈より東流し、その流れは烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦（市内上太田）で急激に挟められ、その狭窄部を抜けて北上川と合流する。雫石川はこれまでに何度も流路を変えており、雫石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。台太郎遺跡はその沖積段丘上に立地している（第1図）。

この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりでなく、微高地上にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない雫石川の下刻が周辺山地からもたらす砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。雫石川の旧河道は幾筋も確認されており、大きなものは4条、そのほかにも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。それらに画された微高地上に古代を中心とした遺跡が点在している。



第2図 台太郎遺跡の位置（1：50,000）

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の立地する沖積段丘上では、縄文時代～古墳時代にかけての遺構遺物の発見は少なく、遺跡のほとんどは7世紀中葉以降の集落遺跡といえる。

縄文～弥生 縄文・弥生時代の遺構・遺物は、本宮熊堂A遺跡、台太郎遺跡及び細谷地遺跡で縄文時代晩期を中心とする竪穴建物跡や遺物包含層が検出されている。その他の各遺跡からは遺物が散見する程度であり、主体的なものではない。また、詳細な時期を特定する要素は乏しいが、飯岡才川遺跡など多くの遺跡で縄文時代の陥し穴が確認されている。

古 代 古墳時代末、7世紀中葉の遺構・遺物は、数は多くはないが台太郎遺跡などで確認されている。これ以降集落が継続的に営まれる。奈良時代、8世紀中葉以降竪穴建物跡を主体とした集落跡が増加する。この時期の集落は、大型竪穴建物跡を中心としてその周囲に小～中型の竪穴建物跡が数棟ずつまとまりをもって分布する傾向がある。

9世紀、平安時代初頭の延暦22年(803)には、本遺跡の西方約1.2kmに「志波城」(下太田方八丁他)が造営される。志波城は東北経営のために朝廷が造営した古代城柵であり、当時「蝦夷(エミシ)」と呼ばれていた人々の社会に大きな影響を与えたと考えられる。征夷大將軍であった坂上田村麻呂が朝廷の命を受け造営した志波城は、北側を流れる雫石川の度重なる洪水の被害を受け、およそ10年で文室綿麻呂の建議により徳丹城(矢巾町西徳田)に移転したことが記録に見られる。その後、徳丹城は9世紀中葉までにはその機能を停止し、本地域も含む北上盆地一帯は、鎮守府胆沢城(奥州市水沢区九蔵田)による一城統治の体制となる。以降、9世紀中葉から本地域では竪穴建物跡を主体とした集落数が増加の一途をたどる。それにともない竪穴建物跡の規模の大小差は縮小するようになり、重複が著しく見られるようになる傾向がある。その中でも、向中野館遺跡の低湿地から古代の祭祀に関係すると考えられる遺物の出土や、飯岡沢田遺跡・飯岡才川遺跡の円形周溝墓群や火葬骨蔵器など、本地域内の集落機能の分化もみられる。また、9世紀後葉から10世紀中葉にかけては、地区の拠点的な集落も姿を現すようになる。細谷地遺跡では、微高地の南斜面に沿うように2×2間の総柱の掘立柱建物跡が東西に並立し、倉庫群が存在したと考えられる。また大宮北遺跡や、志波城跡の北東に隣接する林崎遺跡で、規模の大きな官衙的な掘立柱建物を計画的に配置した集落も発見されており、在地有力者の拠点と考えられる。

中 世 11～12世紀にかけての、様相ははっきりしないが、12世紀末～13世紀初頭頃のものと考えられるかわらけが、大宮遺跡の大溝跡から多量に出土している。13世紀後半には、台太郎遺跡で不整長方形の平面形となる居館が営まれ、地域を支配した豪族の存在が想定される。さらに同遺跡では、土坑墓群や宗教施設と考えられる遺構も検出されており、出土遺物から15世紀頃までの存続が考えられる。また向中野館遺跡や矢盛遺跡でも、堀跡が検出されており、出土遺物やその平面形から16世紀代を中心とする居館と考えられている。

近 世 江戸時代には、雫石川は現在の流路となり、旧河道の東側には奥州道中(街道)や仙北組丁が開かれ、本地域は水田地帯に農家が点在する農村地帯となる。各遺跡からは曲屋などの掘立柱建物跡や土坑墓、南仙北遺跡では道路跡などの近世の遺構が発見されており、この姿は盛南開発が行われる直前の本地域の様子と大きく違いが無いものと考えられる。

2. 調査内容

(1) これまでの調査

発見の経緯 台太郎遺跡は、昭和 60 年度の仙北西地区土地区画整理事業時の工事現場にて、平安時代の竪穴建物跡が発見され周知された遺跡である。平成 5 年度からは、盛南開発に伴う発掘調査が主体を占め、以後平成 25 年度末で 80 回にわたって調査されている。

これまでの県埋文センター・市教委の発掘調査により、7～10 世紀の古代集落、中世の居館を中心とした集落跡や墓域、近世の村落跡などが確認されている。

古 代 古代（奈良・平安時代）の竪穴建物跡は平成 25 年度末で 700 棟以上を数え、そのほかに掘立柱建物跡（2×2 間総柱）や大溝跡などが確認されており、当時の「志波（斯波）」地域最大の集落といえる。遺構の分布をみると、7 世紀末～8 世紀の竪穴建物跡は、いくつかの群をつくりながら南西部を除く遺跡全域に分布し、重複はみられない。それに対し、9～10 世紀の竪穴建物跡は、遺跡の西部と中央～北部の段丘縁辺部に分布が集中し、多くの重複がみられる。個別の竪穴建物跡の特徴をみると、7 世紀末～8 世紀は北西カマドが圧倒的で北東～南カマドもわずかにあるが、カマドの造り替えは少ない。9～10 世紀は北西～北カマド、南東カマドなどさまざま、大型竪穴建物跡にカマドの造り替えが多い。

中 世 中世（鎌倉～戦国時代）になると、12 世紀後半の渥美窯産の灰釉小型壺が遺跡北東より単独出土している。遺跡の立地状況と遺物の年代から推測すると、経筒外容器として経塚に納められていたものと考えられる。ほぼ同時期に、遺跡南東部では堀跡によって、方形に南北 2 つに区画して、その内側には掘立柱建物跡が並立する。堀跡からは奥州藤原氏と同時期の手捏ねのかわらけや渥美窯産の陶器が出土し、後述する居館に先行する施設と考えられる。13 世紀後半には、遺跡中央部に不整形長方形プランの在地領主の居館が営まれ、周辺域にはこれに関連する区画溝や道路跡、掘立柱建物跡、竪穴跡等が分布している。また、遺跡南部には中世の土坑墓群、掘立柱建物跡、竪穴跡、さらに現在の「諏訪神社」の周囲を囲むような堀跡や、社殿または仏堂らしい掘立柱建物跡も確認されている。これらは出土した陶磁器の年代から 15 世紀頃まで存続したと考えられる。居館北東側には幅 6 m 内外で並行する道路側溝状の溝跡があり、この溝の東側には並行して区画整理工事前の道路も存在していた。この道は、遺跡北東部の段丘崖や居館の堀、周辺の区画溝とも並行しており、居館や周辺村落と並存していた道路跡と考えられる。また、本遺跡の南方には、向中野館遺跡（北館、南館）が存在しているが、館跡を構成する曲輪が方形を基調としたプランであることや、北館付近では堀や土橋、小さな曲輪などの複雑な配置であることから、およそ 16 世紀を中心とした年代が考えられる。

近 世 近世（江戸時代）には雫石川は現在の流れとなり、旧河道の東側には奥州道中（街道）が通じ、城下の玄関口にあたる仙北組丁が開かれる。これにより向中野はこの町の郊外となった。この時代の遺構としては、掘立柱建物跡の曲屋跡や直屋跡などが遺跡内に点在するようになる。水田地帯の中に農家が点在する近世の「向中野村」の一部と考えられる。

次数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期 間	検出遺構・遺物	調査主体
1	向中野字台太郎 7-1	土地区画整理	734	1985.5.24-6.25	平安堅穴建物跡 3, 土坑 1, 溝跡 1	市教委
2	向中野字台太郎 7-1	土地区画整理	515	1985.7.1-7.31	平安堅穴建物跡 6, 堅穴跡 1 ほか	市教委
3	向中野字台太郎 18-1	倉庫建設	125	1985.11.13-11.30	奈良堅穴建物跡 1, 平安溝 1	市教委
4	向中野字台太郎 18-3	共同住宅等	1,130	1986.6.2-7.29	堅穴建物跡 (奈良 7, 平安 5) ほか	市教委
5	向中野字台太郎 11-7.71-7	個人住宅建築	50	1989.5.10-5.11	平安堅穴建物跡 1	市教委
6	向中野字台太郎 7-1 外	個人住宅建築	302	1990.5.7-5.26	平安堅穴建物跡 7, 土坑 12 ほか	市教委
7	向中野字向中野 36-3	個人住宅建築	138	1991.4.25-5.8	奈良堅穴建物跡 1, 溝 2	市教委
8	向中野字台太郎 12-2 外	事務所建設	830	1991.6.17-6.27	堅穴建物跡 (奈良 3, 平安 2, 古代 3) ほか	市教委
9 試掘	向中野字向中野 40	小屋建築	50	1993.5.11	遺構・遺物なし	市教委
10 試掘	向中野字向中野地内	盛南開発	1,200	1995.4.4-4.6	奈良堅穴建物跡 8, 土坑 7, 溝跡 12 ほか	市教委
11 試掘	向中野字台太郎 9-3 外	倉庫建設	320	1995.6.19-6.27	遺構・遺物なし	市教委
12 試掘	向中野字八日市場地内	盛南開発	5,174	1995.9.1-11.30	古代堅穴建物跡 53, 土坑 34, 溝跡 58 ほか	市教委
13 試掘	向中野字向中野 1-45 外	盛南開発	4,064	1996.10.14-10.25	平安堅穴建物跡 11, 土坑 21, 溝跡 38 ほか	市教委
14	向中野字台太郎 18-1	下水管理設	25	1996.11.25-11.29	平安堅穴建物跡 1, 平安溝跡 1	市教委
15	向中野字八日市場 33-2 外	盛南開発	12,906	1997.4.4-11.26	堅穴建物跡 (奈良 10, 平安 52), 土坑 43 ほか	県埋文
16	向中野字向中野 36-1 外	盛南開発	790	1997.8.1-8.29	奈良堅穴建物跡 2, 溝跡 2, 掘跡 1 ほか	県埋文
17 試掘	向中野字向中野地内	下水管理設	10	1997.8.23	遺構・遺物なし	市教委
18	向中野字向中野 26-6 外	盛南開発	26,404	1998.4.15-11.20	堅穴建物跡 (古墳～奈良 42, 平安 65) ほか	県埋文
19	向中野字向中野 16-6 外	盛南開発	4,755	1998.7.2-8.31	奈良・平安堅穴建物跡 20, 堅穴跡 5 ほか	県埋文
20	向中野字向中野地内	盛南開発	1,400	1998.9.17-12.21	古代掘立柱建物跡 4, 柱列跡 1, 土坑 12 ほか	市教委
21 試掘	向中野字台太郎 18-7	車庫建築	28	1998.9.25	遺構・遺物なし	市教委
22	向中野字向中野 39-1 外	警察宿舍建設	2,500	1999.9.1-11.2	縄文土坑 1, 奈良堅穴建物跡 1 ほか	県埋文
23	向中野字向中野 16-15	盛南開発	27,800	1999.4.16-11.15	堅穴建物跡 (古墳～奈良 35, 平安 27) ほか	県埋文
24	向中野字向中野地内	盛南開発	3,425	1999.5.6-7.16	堅穴建物跡 (奈良・平安 20) ほか	市教委
25	向中野字八日市場地内	盛南開発	3,674	1999.7.7-12.15	堅穴建物跡 (奈良・平安 73) ほか	市教委
26	向中野字向中野 16-15 外	盛南開発	13,662	2000.4.19-10.30	堅穴建物跡 (古墳～奈良 34, 平安 34) ほか	県埋文
27	向中野字八日市場地内	盛南開発	2,513	2000.6.12-11.14	奈良・平安堅穴建物跡 21, 土坑 23 ほか	市教委
28	向中野字八日市場地内	盛南開発	460	2000.6.29-9.8	平安堅穴建物跡 9, 掘立柱建物跡 2 ほか	市教委
29	向中野字向中野 20-2	盛南開発	125	2000.7.19-8.25	奈良堅穴建物跡 1, 近世土坑 3 ほか	市教委
30	向中野字八日市場 43-1	盛南開発	35	2000.7.25-7.31	平安堅穴跡 1, ビット	市教委
31	向中野字八日市場 45-2	盛南開発	128	2000.8.1-8.8	奈良・平安堅穴建物跡 2, 溝跡 2	市教委
32	向中野字八日市場 42 外	盛南開発	1,030	2000.9.18-10.20	奈良・平安堅穴建物跡 6, 土坑 7 ほか	市教委
33	向中野字八日市場 50	盛南開発	695	2000.9.22-10.13	古代堅穴建物跡 3, 溝跡 3	市教委
34 試掘	向中野 2 丁目 4-1 外	共同住宅建設	156	2000.11.20-11.22	古代堅穴建物跡 3, 溝跡 1	市教委
35	向中野字向中野 37-3 外	盛南開発	4,394	2001.4.17-8.2	堅穴建物跡 (奈良 5, 平安 10), 土坑 4 ほか	県埋文
36	向中野字向中野 37-3 外	盛南開発	290	2001.5.22-6.5	ビット 4	県埋文
37	向中野字向中野 20-1 外	盛南開発	872	2001.5.28-6.22	奈良堅穴建物跡 1, 土坑 5, 溝跡 2	市教委
38	向中野字向中野 15-1.3-4	盛南開発	309	2001.6.1-6.15	遺構・遺物なし	市教委
39	向中野字向中野 20-1 外	盛南開発	1,302	2001.8.1-11.2	奈良・平安堅穴建物跡 12, 土坑 10 ほか	市教委
40	向中野字八日市場 41-2	個人住宅建築	300	2001.8.1-9.19	平安堅穴建物跡 3, 土坑 4, 堅穴跡 1 ほか	市教委
41	向中野字八日市場 45-9	個人住宅建築	220	2001.8.2-9.19	堅穴建物跡 (奈良 4, 平安 2), 土坑 3 ほか	市教委
42	向中野字八日市場 28-4	盛南開発	123	2001.11.26-12.12	平安堅穴建物跡 1, 土坑 2, 溝跡 3	市教委
43	向中野字向中野 22 外	盛南開発	112	2001.11.26-12.12	遺構・遺物なし	市教委
44	向中野字八日市場 41-1	盛南開発	2,907	2002.4.9-8.5	堅穴建物跡 (古墳～奈良 11, 平安 9) ほか	県埋文
43 補	向中野字向中野 22 外	盛南開発	42	2002.4.22	遺構・遺物なし	市教委
45	向中野字八日市場 30-2 外	盛南開発	1,618	2002.5.7-8.9	平安堅穴建物跡 13, 堅穴跡 4, 土坑 36 ほか	市教委
46	向中野字向中野 35-2 外	盛南開発	334	2002.10.11-11.12	奈良堅穴建物跡 2	市教委
47 試掘	向中野二丁目 1-7	共同住宅建設	184	2002.11.6	遺構・遺物なし	市教委
48 試掘	向中野二丁目 5-8・9	店舗建設	326	2002.11.21-11.22	古代堅穴建物跡 12, 土坑 3, 溝跡 6 ほか	市教委
49 試掘	向中野一丁目 17-2 の一部	共同住宅建設	48	2002.12.24-12.25	遺構・遺物なし	市教委
50	向中野字向中野 37-5 外	盛南開発	540	2003.6.2-11.10	古代土坑 2, 溝跡 2, ビット	県埋文
51	向中野字八日市場 8-4 外	盛南開発	6,616	2003.4.11-11.10	堅穴建物跡 (縄文 4, 奈良～平安 22) ほか	県埋文
52	向中野字八日市場 7-1 外	国道建設	595	2003.8.1-9.3	平安堅穴跡 1, 溝跡 8	県埋文
53	向中野字向中野 37-3 外	盛南開発	240	2004.5.6-6.2	古代溝跡 5, 土坑 1	県埋文
54	向中野字向中野 19 外	盛南開発	5,052	2004.4.12-8.6	堅穴建物跡 (古墳～奈良 4, 平安 9) ほか	県埋文
55	向中野字向中野 35-26	個人住宅建築	203	2004.6.7-7.9	古墳～奈良堅穴建物跡 1, 堅穴跡 1 ほか	市教委
56	向中野字向中野 20-2 外	盛南開発	50	2005.6.20-6.21	平安土坑 1	市教委
57	向中野字向中野 9 外	盛南開発	1,047	2005.6.6-8.5	平安堅穴建物跡 6, 掘立柱建物跡 2 ほか	市教委
58	向中野字向中野 40-16 外	盛南開発	3,945	2006.8.7-11.24	堅穴建物跡 (奈良 10, 平安 1) ほか	県埋文
59	向中野字向中野 9 外	盛南開発	1,830	2007.7.5-9.26	奈良堅穴建物跡 2, 掘立柱建物跡 2 ほか	市教委
60	向中野字向中野 40-8 外	盛南開発	791	2007.8.1-9.6	土坑 4, ビット	市教委
61	向中野字向中野 17-4 外	盛南開発	610	2007.10.26-11.16	奈良堅穴建物跡 1, 土坑 4, ビット	市教委
62	向中野字向中野 40-7 外	盛南開発	862	2008.6.18-7.9	土坑 1, ビット	市教委
63	向中野字向中野 17-1 外	盛南開発	1,698	2008.7.3-10.31	古代堅穴建物跡 2, 堅穴跡 1, 土坑 4 ほか	市教委
64	向中野字向中野 21-2 外	盛南開発	621	2008.11.19-12.12	土坑 1	市教委
65	向中野字向中野 40-16 外	盛南開発	330	2009.4.17	遺構・遺物なし	市教委
66	向中野字向中野 42-25 外	盛南開発	11,911	2009.6.1-11.27	古代堅穴建物跡 5, 掘立柱建物跡 72 ほか	県埋文
67	向中野字八日市場 23-1 外	盛南開発	856	2009.5.7-7.28	古代堅穴建物跡 2, 土坑 2, 溝跡 1	市教委
68	向中野字八日市場 30-1 外	盛南開発	1,234	2009.7.1-11.6	古代堅穴住居跡 13, 堅穴跡 3, 土坑 10 ほか	市教委
69	向中野字向中野 18-4 外	盛南開発	76	2009.10.1	遺構・遺物なし	市教委
70	向中野字向中野 13-1 外	盛南開発	1,914	2009.10.21-12.24	古代堅穴建物跡 4, 堅穴跡 4, 溝跡 2	市教委
71 試掘	向中野一丁目 10・15 外	店舗建設等	1,341	2010.8.9-8.12・18	古代堅穴建物跡 32, 土坑 7, 溝跡 8 ほか	市教委
72 試掘	向中野字向中野 35-34 外	盛南開発	506	2010.10.21-12.17	奈良堅穴建物跡 1, 堅穴跡 2, 土坑 5 ほか	市教委
73	向中野一丁目 15, 16-12 外	宅地造成	587	2011.4.4-4.5	古代堅穴建物跡 7, 溝跡 2	市教委
74	向中野字八日市場 30-1 外	盛南開発	4,360	2011.5.9-7.21	平安堅穴建物跡 8, 堅穴跡 7, 土坑 21 ほか	市教委
75 試掘	向中野一丁目 9-19	共同住宅建設	1,120	2011.5.30-7.15, 9.6-11.11	堅穴建物跡 (奈良 7, 平安 3), 土坑 16 ほか	市教委
76 試掘	向中野二丁目 6-2	宅地造成	21	2012.11.22	遺構・遺物なし	市教委
77	向中野二丁目 7-2	店舗建設	177	2013.3.12-3.13	古代堅穴建物跡 10, 溝跡 1	市教委
78	向中野二丁目 3-11	個人住宅建築	516	2013.5.1-6.4	平安堅穴建物跡 2, 掘立柱建物跡 1 ほか	市教委
79	向中野二丁目 3-3	個人住宅建築	55	2013.6.12-6.21, 7.4-7.24	平安掘跡 1, 古代土坑 1, 溝跡 1	市教委
80	向中野二丁目 6-2	宅地造成	67	2013.6.12-6.21, 7.4-7.24	奈良堅穴建物跡 1, 土坑 1 ほか	市教委
			1,155	2013.7.22-12.2	堅穴建物跡 (奈良 3, 平安 28), 土坑 27 ほか	市教委

第 3 表 台太郎遺跡調査成果



第3図 台太郎遺跡全体図

(2) 平成 25 年度の調査

台太郎遺跡における平成 25 年度の発掘調査は、第 77～80 次調査の 4 件である。このうち、国庫補助事業として実施したのは、個人住宅新築工事に伴う第 78・79 次調査の 2 件である。第 77・80 次調査は民間開発に伴う調査である。

第77次調査 第 77 次調査は店舗建設工事に伴う事前調査で、遺跡東部に位置し、調査面積 516㎡である。検出された遺構は平安時代（9 世紀後半～10 世紀前半）の竪穴建物跡 2 棟、掘立柱建物跡 1 棟、竪穴跡 3 棟、土坑 5 基などである。とくに 9 世紀後葉に構築された竪穴建物跡の埋土上層から、被熱した多量の礫とともに土師器把手付土器が出土している。この土器は、北海道を中心とした（東北部の一部含む）擦文文化の影響を受けており、盛岡周辺では初見である。

第80次調査 第 80 次調査は宅地造成に伴う事前調査で、第 77 次調査と同様に遺跡東部に位置し、調査面積 1,155㎡である。検出された遺構は奈良時代（8 世紀後半）の竪穴建物跡 3 棟、土坑 2 基、平安時代（9 世紀後半～10 世紀前半）の竪穴建物跡 28 棟、掘立柱建物跡 1 棟、土坑 5 基などである。とくに平安時代の竪穴建物跡の密度は、極めて高く重複が著しい。これまでの調査で、平安時代の竪穴建物跡は遺跡西部、中央部～北部の段丘縁辺部にかけて分布が集中しており、重複が多いことが判明している。第 80 次調査の結果から遺跡東部でも同様な傾向が確認できる。第 77 次調査とあわせて、調査事例の少ない遺跡東部での遺構の時期や分布など古代集落の様相を考える上で重要な成果となった。

(3) 第 78 次調査

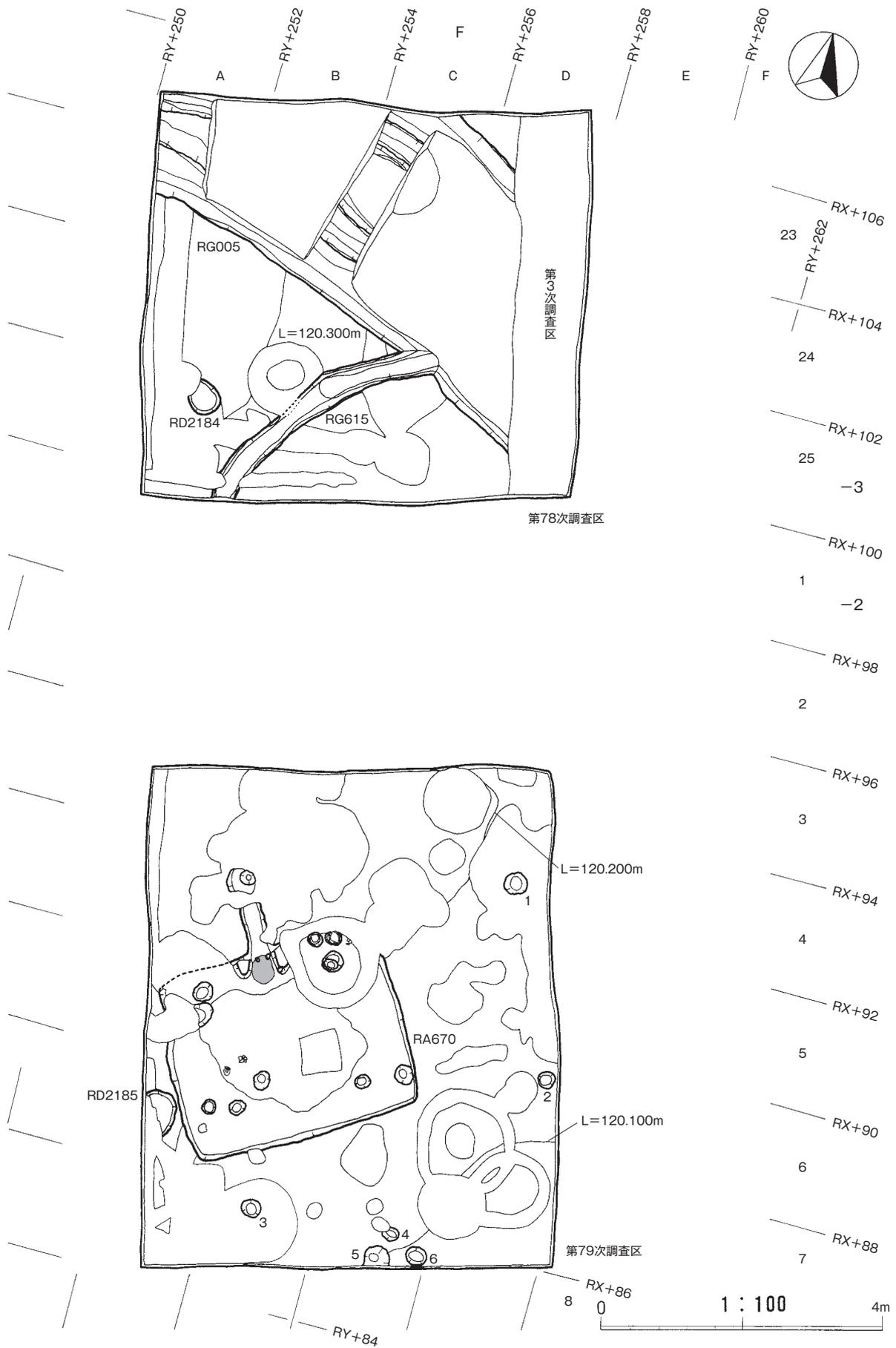
位 置 第 78 次調査区は、台太郎遺跡の北東部に位置し、第 4・14 次調査区の南、第 3 次調査区の西に隣接する。また少し離れて南には第 79 次調査区が位置する（第 3 図）。調査区は旧小屋の基礎や埋設管等による削平・攪乱を受けており、調査区内は西から東方向に緩やかに傾斜する地形で、検出面の標高値は 120.300 m 前後である。また調査区東で、第 3 次調査区の一部を確認している。

基本層序 調査区内で確認された基本層序は以下の I～IV 層に大別される。I a 層は表土であるが、旧小屋建築等の攪乱・削平を受け、調査区北側の一部で確認されるのみである。II a 層はやや粘性がある暗褐色土層で、漸移層である。I a 層と同様に攪乱・削平を受けている。III 層はやや粘性がある褐色シルト層（地山）で、その上面が遺構検出面である。これより下部は低位段丘を構成する砂礫層（IV 層）となり、R G 005 堀跡の底面でその上面を確認している。

検出状況 II a 層を除去した III 層上面で検出作業が行われた。検出された遺構は、平安時代の堀跡 1 条（R G 005）、溝跡 1 条（R G 615）、古代の土坑 1 基（R D 2184）である（第 4 図）。

検出遺構 出土遺物の時代・時期は、平安時代（9 世紀前半～後半）にかけての須恵器、あかやき土器、土師器が主体で、中世以降の遺物は検出面 III 層上面から瓷器系陶器挿鉢の口縁部破片が 1 点出土している。遺物総数は収納コンテナ（54cm × 34cm × 15cm）1 箱分である。

また R G 005 堀跡の調査は、住宅基礎の工事掘削深度（地表より約 0.70 m）及び緩衝部分（約 0.10 m）まで精査を実施し、一部トレンチ調査で底面までの深さと断面形状を確認し、遺構の下半は地下保存とした。



第4図 台太郎遺跡第78次・79次調査全体図

古代の遺構・遺物

RD2184土坑（第5図）

位置	調査区南西（F-2-B1区）	平面形	不整楕円形
規模	残存部長軸-上端 0.47m以上, 下端 0.43m以上, 短軸-上端 0.54m, 下端 0.40m		
重複関係	なし	掘込面	削平 検出面 III層上面
埋土	自然堆積で、暗褐色土を主体とする単層である。黄褐色土の含有率で2層に細分され、A ₁ 層は粒状の黄褐色土を少量含み、カーボン小塊状を含む。A ₂ 層は塊状の黄褐色シルトを多く含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.15mで、外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。	出土遺物	なし 時期 古代

RG005溝跡（第5図）

位置	調査区北東	平面形	南東から北西にのびる。	断面形	逆台形
規模	総延長 19.60m以上, 上端幅- 3.85~4.05m, 下端幅- 0.96~1.20m				
重複関係	RG 615 を切る。	掘込面	削平 検出面	II層上面	
埋土	自然堆積でA~Q層に大別され、各層はさらに細分される。全体的にグライ化しており、下層ほどグライ化が進み、酸化鉄の含有率が高くなる。				
	A層-暗褐色土を主体に、小塊状の黒褐色土を含む層で、カーボン粒と砂を少量含む。あかやき土器甕、土師器甕の小破片が出土している。				
	B層-灰黄褐色シルトを主体とし、粒~小塊状の褐色シルトを含む。2層に細分され、下層は褐色シルトの割合が少ない。カーボン粒、焼土粒を少量含む。土師器坏、あかやき土器甕及び土師器甕の小破片が出土している。				
	C層-黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色シルトを多く含む。2層に細分され、下層は黄褐色シルトの割合が少ない。C ₁ 層はカーボン粒、C ₂ 層は焼土粒~小塊状を含む。須恵器坏、あかやき土器甕及び土師器甕の破片が出土している。				
	D層-黒褐色土を主体とし、小塊状の暗褐色土を僅かに含む。				
	E層-褐灰色土を主体とし、塊状の褐色シルトを多く含む層で、カーボン・焼土粒を微量含む。				
	F層-粒~塊状のにおい黄橙色シルトを少量含む、灰黄褐色シルトと暗褐色土の混合土。5層に細分され、上層ほどにおい黄橙色シルトの割合が多い。				
	G層-褐灰色土と塊状の暗褐色土の混合土で、粉~粒状の黄褐色シルトを微量含む。土師器甕及び球胴甕破片が出土している。				
	H層-灰黄褐色土を主体とし、暗褐色~黒褐色土を粒~塊状に含む層で、カーボン粒を少量含む。3層に細分され、下層ほど暗褐色~黒褐色土の割合が高い。				
	I層-におい黄褐色シルトと暗褐色土の混合土で、粒状の黄褐色シルトとカーボン粒を少量含む。2層に細分され、I ₂ 層の方が黄褐色シルトの割合が若干高い。				
	J層-粘性の高い灰褐色土を主体とし、小塊状の褐色~におい黄褐色土を含む。他の埋土と比較して、軟らかい。2層に細分され、J ₁ 層は土師器球胴甕、カーボン粒多量、砂を含む。J ₂ 層はカーボン粒少量、砂を多量含む。				

K層-にぶい黄橙色土を主体とし、粒～小塊状の灰褐色土を微量含む。また砂を多量に含む。
 L層-粘性の高い灰褐色土と暗褐色土の混合土で、少量の砂と粒状の黄褐色土を微量含む。
 M層-粘性のある黒褐色土を主体とし、塊状のにぶい黄褐色土を含む層。3層に細分され、下層ほどにぶい黄褐色土を多量に含む。
 N層-粘性の高い明黄褐色土と褐灰色土の混合土で、砂と小塊状の暗褐色土を少量含む。3層に細分され、上層ほど暗褐色土と砂の割合が高い。
 O層-粘性の高い灰黄褐色土を主体とし、塊状の明黄褐色土を少量とカーボン小塊状を含む。
 P層-粘性の高い黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色土を多く含む。
 Q層-粘性のあるにぶい黄褐色土を主体とし、塊状の褐灰色土を少量含む。砂と直径2～4cmの礫を含む。

壁の状態 検出面から底面までの深さは1.23～1.52mで、外傾して立ち上がる。壁面は整っており、凸凹はほとんどみられず柱穴は確認できない。

底の状態 トレンチで一部を確認しており、ほぼ平坦である。

出土遺物 (第6図1～2) 1・2は頸部と体部の境に段がある土師器球胴甕でJ₁層から出土している。1はほぼ完形で歪みがあり、器高32.0cm、口径27.5cm、体径31.1cm、底径10.6cmをはかる。口縁部～頸部の外面にかけて縦方向のヘラナデの後に、口縁端部と頸部下端に横方向のヘラナデ、体部外面は縦方向と斜め方向のヘラナデを施す。内面は横方向と縦方向のヘラナデ調整を施す。底面はナデ調整で平滑に仕上げている。体部外面の中位～下半にかけて黒斑が確認される。2は口縁部の一部と体部下～底部にかけて欠損しており、残存高22.7cm、口径21.3cm、体径25.1cmをはかり、内面に巻上げ痕が残る。口縁部～頸部外面に縦方向のヘラナデの後、小単位の横方向のヘラナデ、外面の体部上半は縦方向のヘラナデの後に横方向のヘラナデ、体部下は斜め方向のヘラナデ調整を施す。内面は横方向と斜め方向のヘラナデを施す。図示していないが、C₁層からフイゴ羽口、C₂層から内外黒色処理された土師器坏の小破片が出土している。

時 期 9世紀前葉

RG615溝跡(第5図)

位 置 調査区南(F-2-B1, F-3-C25区)

平面形 南西から北東にやや屈曲しながらのびる。

規 模 総延長4.58m以上、上端幅-0.35～0.60m、下端幅-0.17～0.35m

重複関係 RG005に切られる。掘込面 削平 検出面 II層上面

埋 土 自然堆積でA～C層に大別され、A層はさらに2層に細分される。

A層-黒褐色土を主体とする層で、A₁層は粒状の褐色シルトとあかやき土器甕破片を少量含む、A₂層は粒～小塊状のにぶい黄褐色シルトを多量含む。

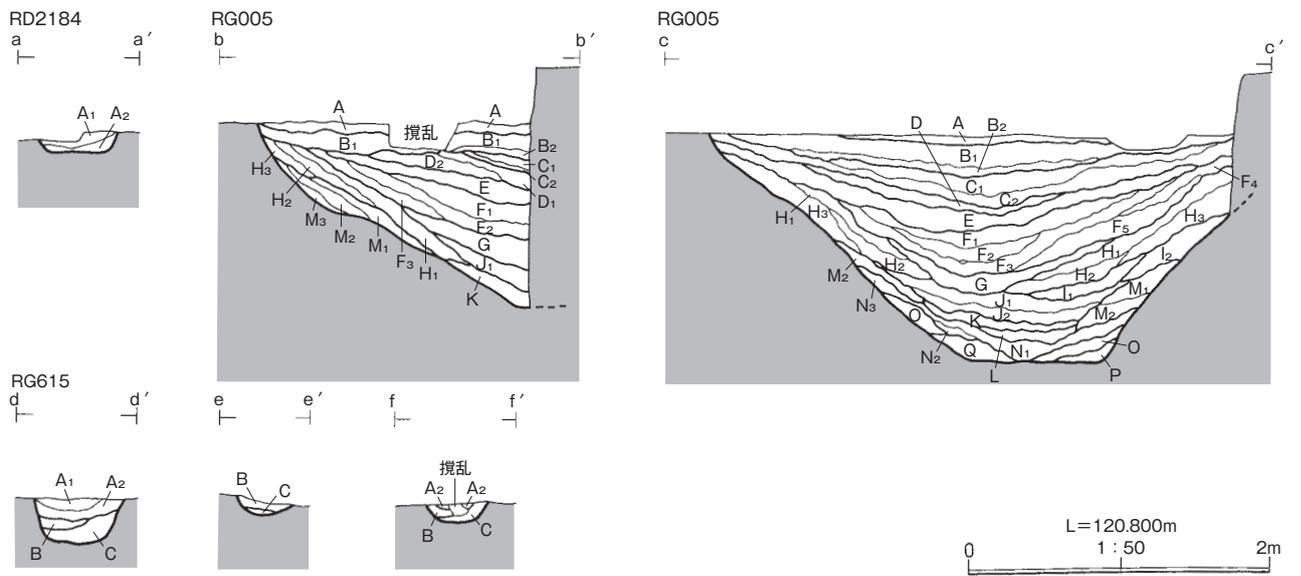
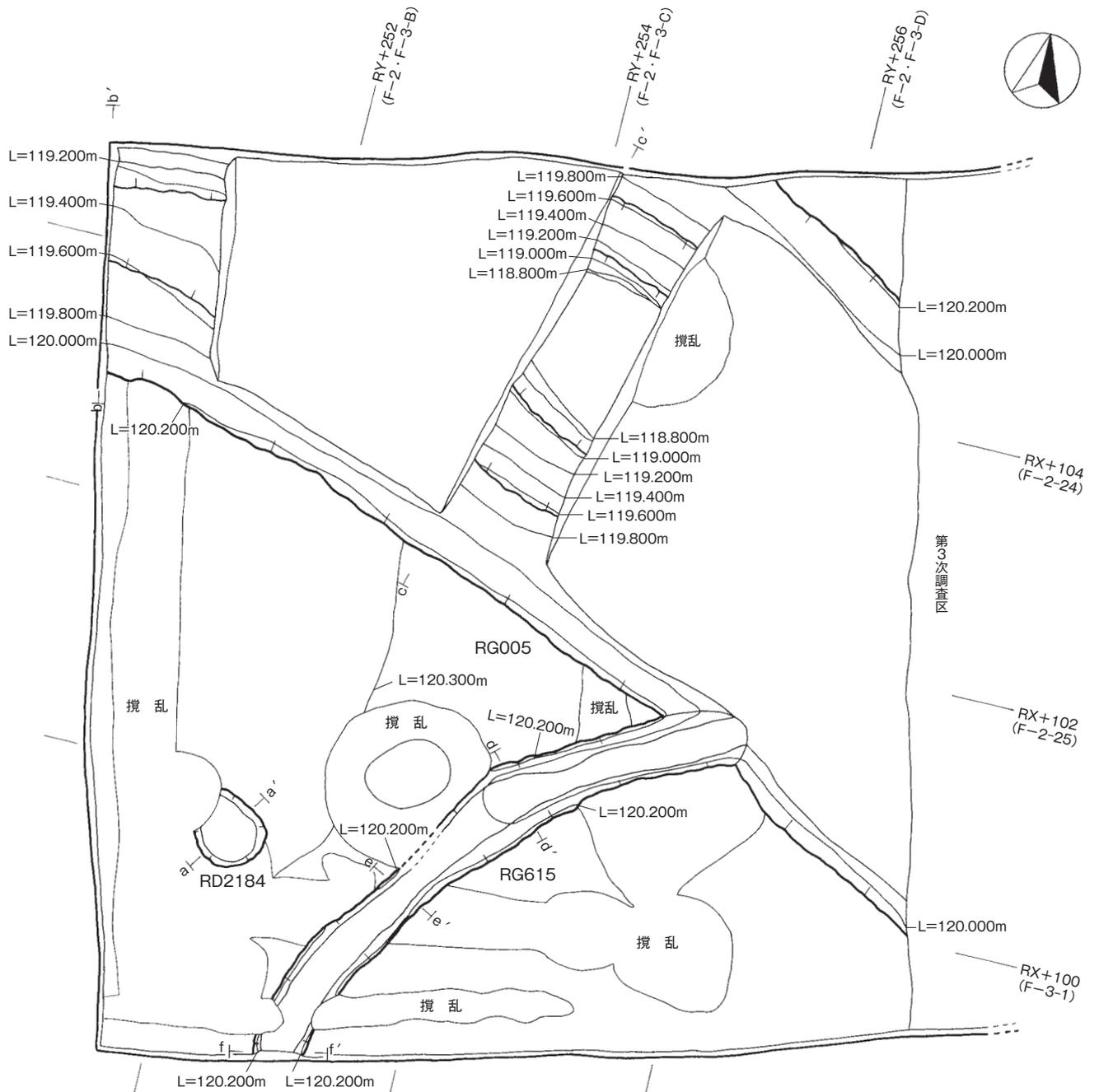
B層-にぶい黄褐色シルトに小塊状の暗褐色土を含む。

C層-にぶい黄褐色シルトを主体とし、塊状の黒褐色土を多く含む。

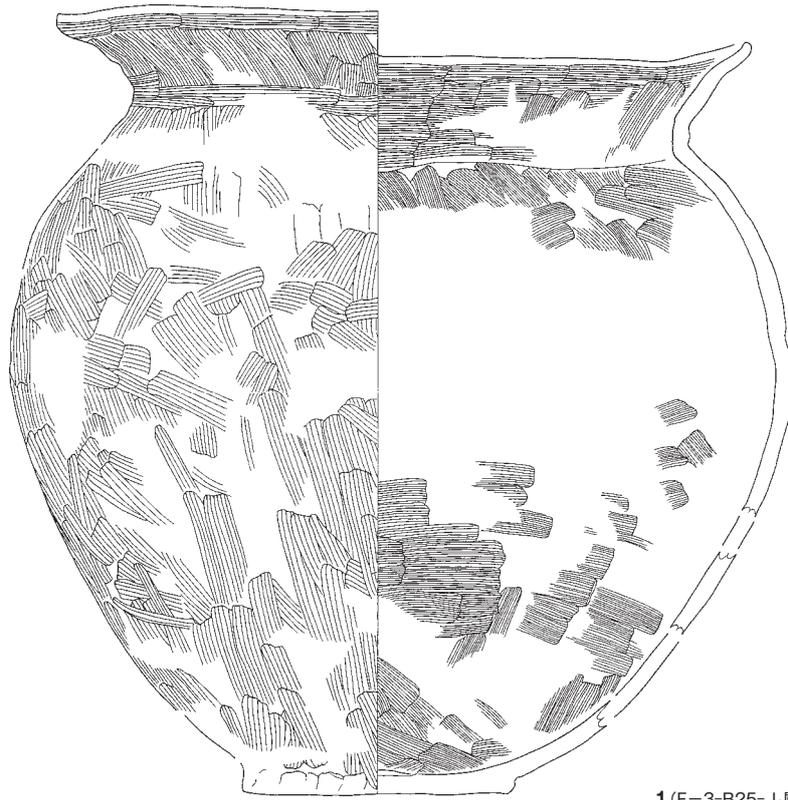
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.12～0.30mで、外傾して立ち上がる。

底の状態 北側はほぼ平坦であるが、南側に向かって徐々に深くなる。

出土遺物 A₁層からあかやき土器甕の体部破片が2点出土している。 時 期 平安時代



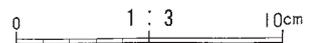
第5図 RD 2184 土坑, RG 005・615 溝跡



1 (F-3-B25-J,層)



2 (F-3-B25-J,層)



第6図 R G 005 堀跡出土土器

(4) 第79次調査

位置 第79次調査区は、台太郎遺跡の北東部に位置し、第3次調査区の西に隣接する。また少し離れて北には前述の第78次調査区が位置する（第3図）。調査区は第78次調査よりも削平・攪乱を著しく受けており、調査区内は北西から南東方向に緩やかに傾斜する地形で、検出面の標高値は120.100～120.200m前後である。

基本層序 調査区内で確認された基本層序は第78次調査と同様であるが、表土のⅠa層と低位段丘を構成する砂礫層のⅣ層は確認できなかった。

検出状況 Ⅱa層を除去したⅢ層上面で検出作業が行われた。検出された遺構は、奈良時代の竪穴建物跡

検出遺構 1棟（RA 670）、古代の土坑1基（RD 2185）、ピット6口である（第4図）。

出土遺物の時代・時期は、奈良時代（8世紀後葉）にかけての土師器が主体である。このほか、遺構外であるが、Ⅱa層及び検出面のⅢ層上面からあかやき土器坏・甕、土師器甕の小破片が出土している。遺物総数は収納コンテナ（54cm×34cm×15cm）1箱分である。

古代の遺構・遺物

RA 670 竪穴建物跡（第7図）

位置 調査区中央西（F-2-C・D6区） **平面形** 方形 **主軸方向** N 30° W

規模 北西-南東 3.49m, 南西-北東 4.25m **重複関係** なし

掘込面 削平 **検出面** Ⅱ層上面

埋土 自然堆積でA～D層に大別され、A・C層はさらに2層に細分される。

A層-暗褐色土を主体とし、A₁層は粒状のにぶい黄褐色シルトとカーボン粒を少量含む、C₂層は粒～塊状のにぶい黄褐色シルトを多量含む。

B層-粒状のにぶい黄褐色シルトを少量含む、黒褐色土と暗褐色土の混合土。

C層-黒褐色土を主体とする層で、C₁層は少量の焼土粒と小塊状の明黄褐色シルトを多量含む、C₂層は粒状の明黄褐色シルトを微量含む。

D層-黄褐色土を主体とし、粒～塊状の黒色土を少量含む。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.10～0.19mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で中央に硬化面が広がる。構築土（L層）はにぶい黄橙色シルトと暗褐色土の混合土を主体とし、粒状の黒褐色土を微量含む。層厚は0.02～0.10mである。

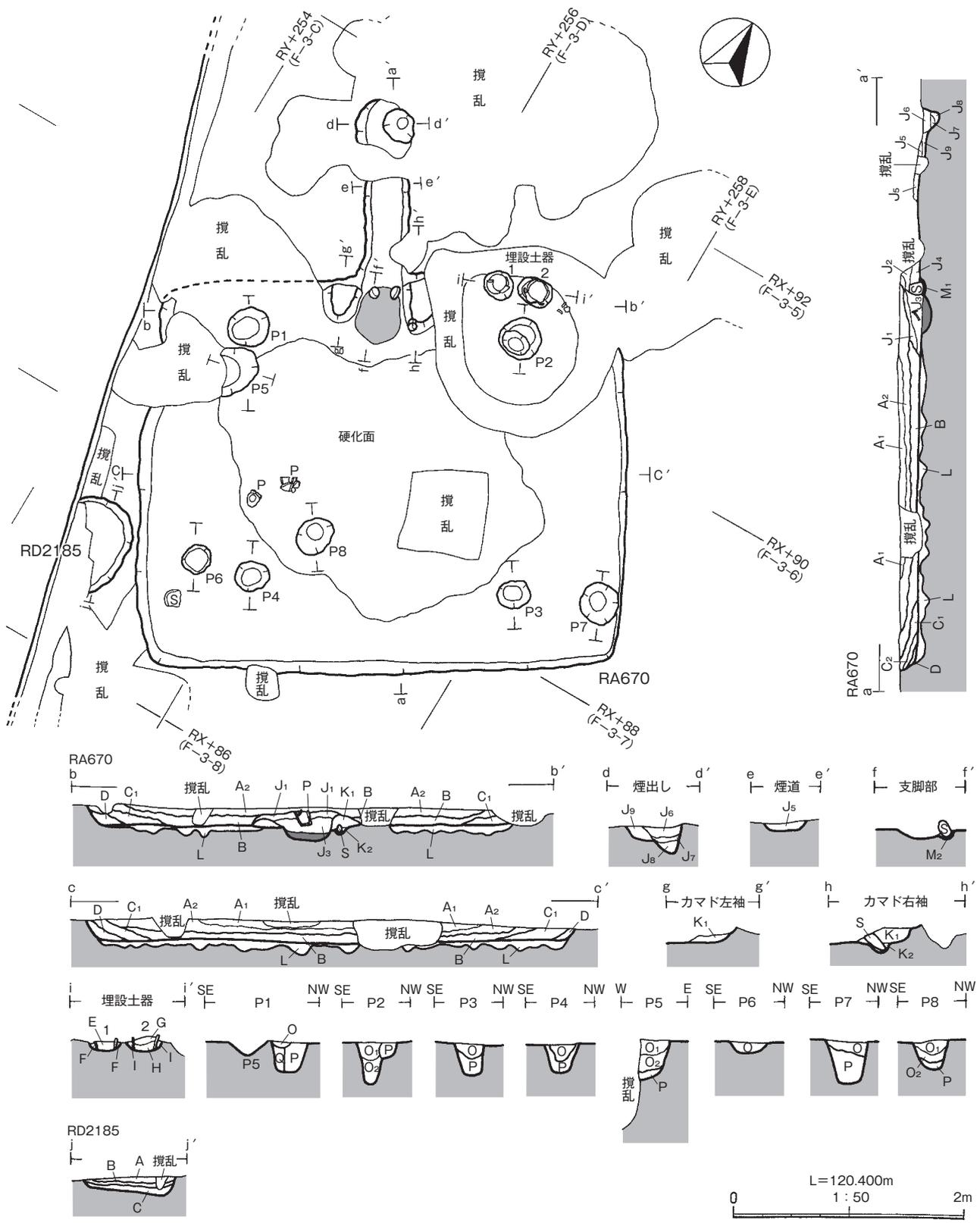
カマド カマドは北西壁に位置する。カマド東と煙道から煙出しにかけて攪乱されている。煙道平面形は不整な溝状で、火床面から煙出しに向かって緩やかに傾斜し、深くなっている。規模は北西壁から煙出しの先端までの長さ1.53m、幅0.25～0.30m、検出面からの深さ0.13～0.31mをはかる。カマドはにぶい黄橙色シルトに小塊状の黒褐色土と礫を含む混合土（K_{1.2}層）で構築し、規模は西残存部が長さ0.35m、幅0.27～0.35m、高さ0.06m、東残存部が長さ0.47m、幅0.20～0.23m、高さ0.13mをはかる。火床面（J₁₀層）は径0.33～0.51mの不整楕円形で、熱浸透層は厚さ0.08mをはかる。カマド支脚は火床面北西端に2個の円礫を立てて、下部を床面に埋めて用いている。それぞれの礫の一部は被熱で赤変化している。支脚を据えるための掘方埋土（M_{1.2}層）は褐色

シルトと暗褐色土の混合土である。カマド崩壊土（J₁₋₉層）は9層に細分され、粒～塊状の褐色～黄褐色シルトを含む暗褐色土である。J₁層はカマド天井部が崩壊した層である。J₂₋₈層のいずれも焼土とカーボンを含み、とくにJ₃層は多量の焼土粒～塊とカーボン粒を含む。なお、この崩壊土は煙出しから煙道、さらに火床面と床面の一部の範囲を覆っている。

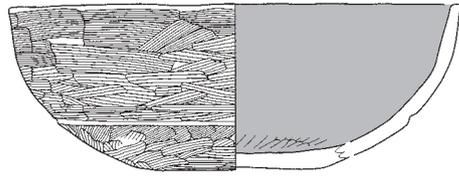
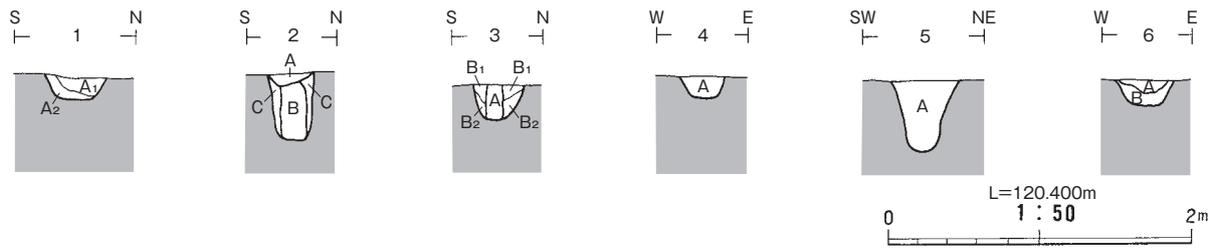
埋設土器 北西壁北隅で埋設土器が2基確認されている。2基とも床面構築土を掘り込み、体部下半～底部を欠損した土師器甕を正立の状態に埋設している。埋設土器1の掘方は円形で、規模は径0.23～0.26m、床面からの深さ0.08mをはかる。掘方埋土（F層）は明黄褐色シルトと塊状の黒褐色土の混合土である。土器内部の埋土（E層）は暗褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色シルトを少量含み、やや軟らかく締まりが弱い。埋設土器2の掘方は不整な円形で、規模は径0.22～0.33m、床面からの深さは0.08mをはかる。掘方埋土（I層）は黄褐色シルトを主体とし、粒状の暗褐色土を少量含む。土器内部の埋土はG・H層に大別され、G層は褐色シルトに小塊状の灰黄褐色シルトを少量含み、締まりがない。H層は塊状の黄褐色シルトをやや多く含む暗褐色土である。

柱 穴 その他ピットを床面上に7口検出しており、支柱穴はP1～4である。柱痕跡はP1・2で確認され、柱痕跡埋土は暗褐色土を主体に粒状の黄褐色シルトを少量含む。掘方埋土は明黄褐色シルトを主体に小塊状の黒褐色土を少量含み、堅く締まっている。各ピットの規模・深さは、P1 - 径0.33～0.37m、深さ0.26m、P2 - 径0.35～0.37m、深さ0.37m、P3 - 径0.23～0.29m、深さ0.28m、P4 - 径0.26～0.31m、深さ0.29m、P5 - 残存部径0.42m、深さ0.36m、P6 - 径0.26m、深さ0.11m、P7 - 径0.32～0.37m、深さ0.37mである。

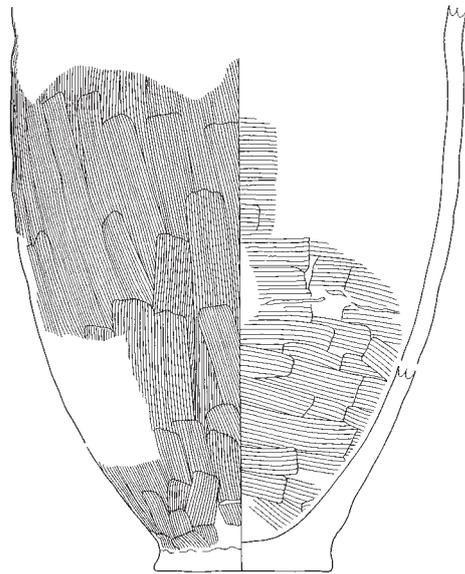
出土遺物 (第8・9図1～9) 1は土師器の坏である。深い平底風丸底で、口縁部と体部の境に1条の沈線によって段を作っている。外面はヘラナデ、内面は黒色処理され、内面全体にヘラミガキを施す。2～6は土師器甕である。2は器形の傾きが大きく、器高27.7cm、口径18.4cm、底径6.8cmをはかり、外面の底部付近に巻上げ痕が残る。器面調整は外面に縦方向のヘラナデ、内面は口縁部～体部下半にかけて横方向のヘラナデ、底部付近に縦方向の弱いヘラミガキを施す。底面にはヘラナデを施すが、木葉痕が残存する。3は口縁部～体部上半を欠損し、外面が縦方向のヘラナデ、内面には横方向のヘラナデを施す。内外面に巻上げ痕が残る。4・5は埋設土器で、体部下半～底部を欠損している。4は残存高16.2cm、口径20.6cmをはかる。外面は口縁部～頸部に縦方向のヘラナデの後にヨコナデ、体部は縦方向のヘラナデ、内面は口縁部がヨコナデの後ヘラナデ、体部も横方向のヘラナデが施される。5は残存高16.6cm、口径20.5cmをはかる。口縁部内外がヨコナデ、体部外面は縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラナデ調整である。6は体部下半～底部で、底面には木葉痕が残る。内外面にヘラナデ調整が施される。7は口縁部が直立する器形で、体部下半～底部を欠損している。残存高20.2cm、口径16.6cmをはかる。頸部と体部の境にわずかであるが、段が確認される。口縁部～頸部の外面にヘラミガキ、体部にはヘラナデの後、主に縦方向のヘラミガキを施す。内面の口縁部から体部上半にかけて横方向のヘラナデ、それより下方はヘラケズリを施す。8・9は土師器小型甕である。8は器高18.5cm、口径17.0cm、底径6.0cmをはかり、口縁部内外はヨコナデで、一部ヘラナデが施される。体部は内外面ともヘラナデ調整である。9は器形の傾きがあり、器高16.6cm、口径17.2cm、底径6.2cmをはかる。口縁部外面に縦方向のヘラナデの後、頸部の段に沿ってヨコナデ、体部外面はヘラナデの後にヘラミガキ、内面はヘラナデが施される。 時 期 8世紀後葉



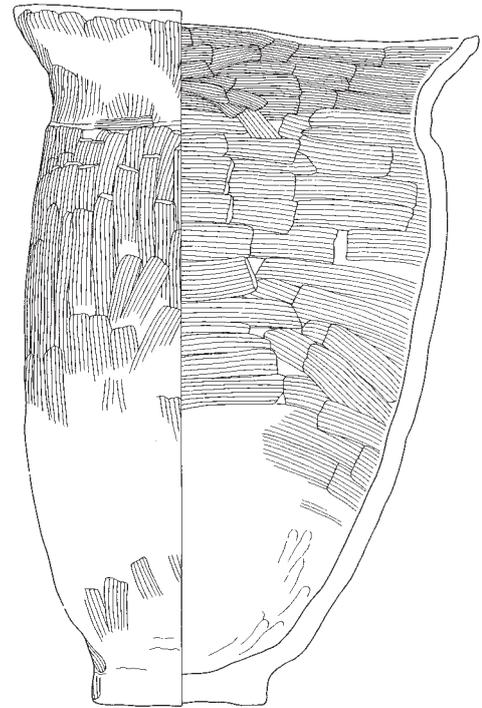
第7図 RA670 竪穴建物跡, RD2185 土坑



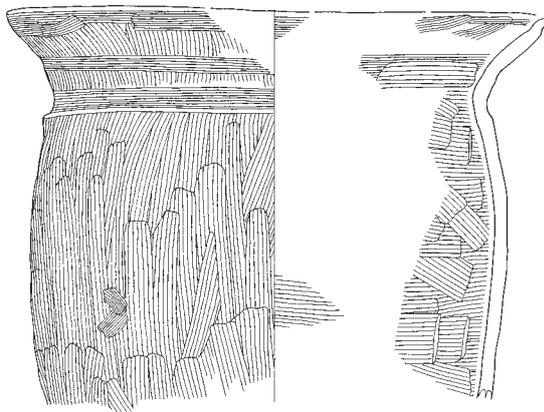
1 (F-2-C5-J₄層)



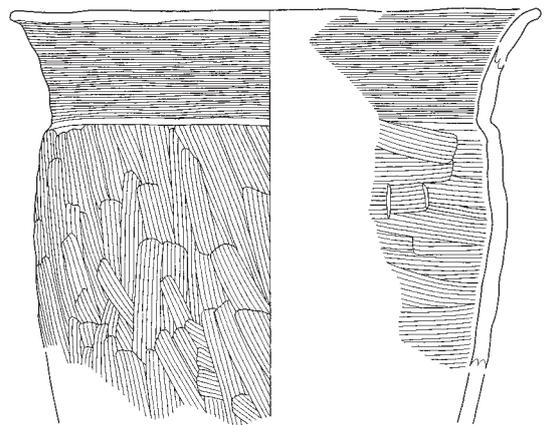
3 (F-2-C6-J₃層)



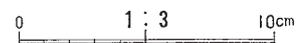
2 (F-2-D5-B層)



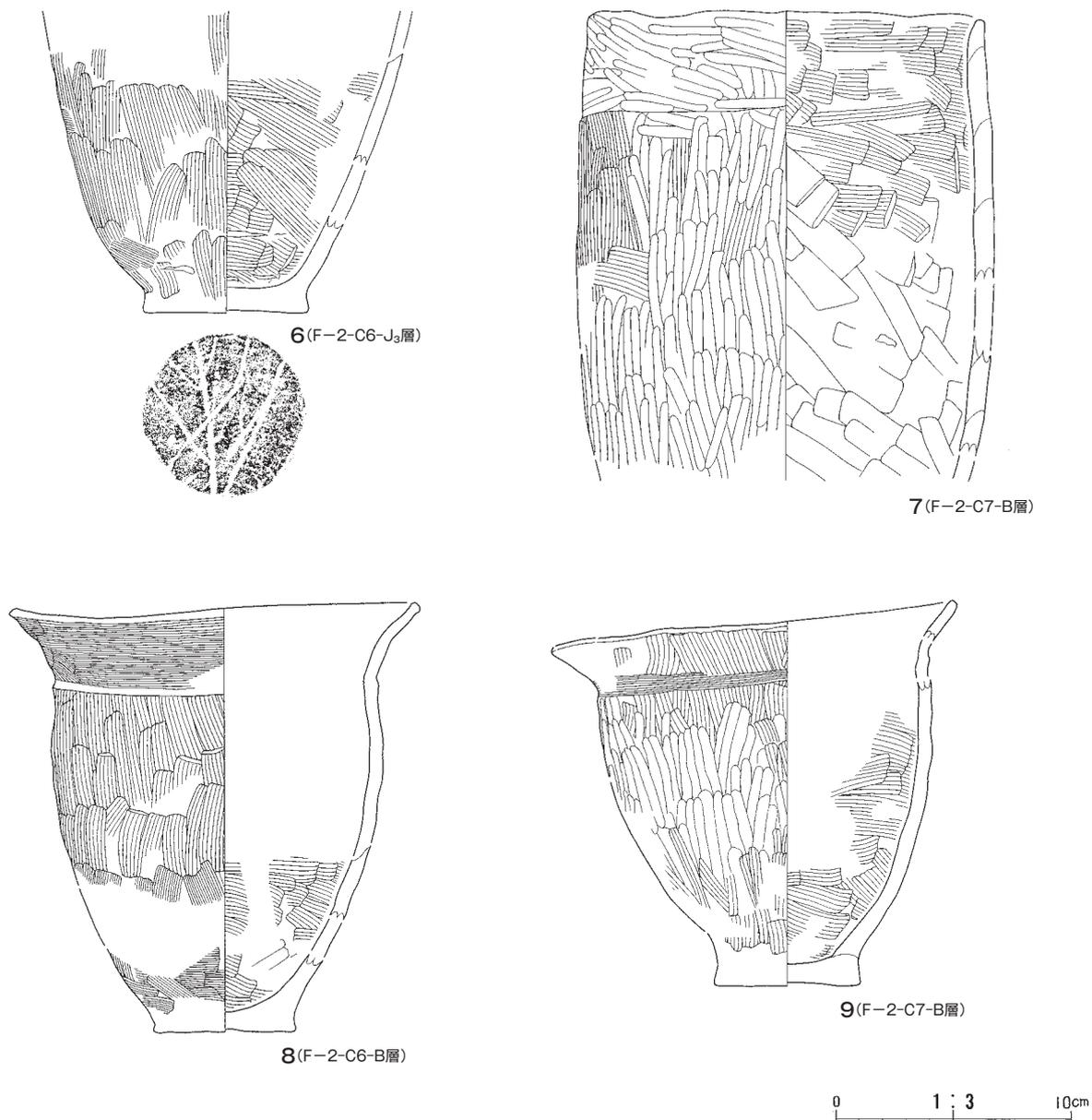
4 (F-2-D5-埋設土器1)



5 (F-2-D5-埋設土器2)



第8図 ピット土層断面, R A 670 竪穴建物跡出土土器 (1)



第9図 RA 670 竪穴建物跡出土土器 (2)

RD 2 1 8 5 土坑 (第7図)

位置	調査区南西 (F-2-C7区)	平面形	不整楕円形
規模	残存部長軸-上端 0.56m, 下端 0.50m, 残存部短軸-上端 0.46m以上, 下端 0.39m以上		
重複関係	なし	掘込面	削平 検出面 Ⅲ層上面
埋土	自然堆積でA~C層に大別される。		
	A層-暗褐色土を主体とする層で, 少量のカーボン粒と粒状の黒褐色土を微量含む。		
	B層-粒~小塊状の黄褐色シルトを多く含む黒褐色土。カーボン粒を微量含む。		
	C層-暗褐色土を主体とし, 粒状のにぶい黄褐色シルトを少量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.06 ~ 0.17mで, 直立気味に外傾して立ち上がる。		
底の状態	南から北に向かって傾斜する。	出土遺物	なし 時期 古代

古代以降の遺構

ピット群（第4・8図）

調査区のほぼ全域から6口のピット（P1～6）が検出されている。検出面はP2・4～6がⅢ層上面であり、その他は攪乱層を除去したⅢ層である。埋土は黒褐色土や暗褐色土が主体となるものが多い。柱痕跡が認められるピットはP2・3である。またピットからの出土遺物はない。各ピットの規模及び検出面からの深さは以下のとおりである。

P1 - 径0.39～0.41m, 深さ0.14m・P2 - 径0.29～0.31m, 深さ0.43m・P3 - 径0.31～0.36m, 深さ0.24m・P4 - 径0.25～0.31m, 深さ0.14m・P5 - 径0.44～0.47m, 深さ0.47m・P6 - 径0.33～0.38m, 深さ0.17m

（5） 調査のまとめ

台太郎遺跡第78・79次調査の結果、遺跡北東部での奈良・平安時代の集落域が確認された。検出された遺構は、第78次調査では平安時代の堀跡1条（R G 005）、溝跡1条（R G 615）、古代の土坑1基（R D 2184）で、第79次調査では奈良時代の竪穴建物跡1棟（R A 670）、古代の土坑1基（R D 2185）、ピット6口である。出土遺物は古代の須恵器、あかやき土器、土師器が主体である。ここでは主要な遺構・遺物について述べることとする。

第78次調査 第3・4・14次調査で確認されている平安時代のR G 005堀跡を確認した。住宅基礎の工事掘削深度まで精査を実施し、2箇所のトレンチ調査によって断面形状と底面までの深度を確認した。上端幅は約4m前後、下端幅約1m前後で、断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは最深部で1.52mをはかる。堀跡の埋土を観察すると、下層に砂を含む層が複数確認でき、堀として機能していた時期には水が流れていたと考えられる。北に隣接する第4次調査では、埋土から小札と考えられる鉄製品が出土しているが、今回の調査では鉄製品は出土せず、下層から人為的に廃棄された土師器球胴甕が2個体出土している。何らかの儀式に伴う廃棄行為の可能性が想定されたため、トレンチの一部を拡張したが、そのような痕跡は確認できなかった。出土した土師器球胴甕の年代は9世紀前葉と考えられ、構築時期は9世紀初頭～前葉頃と捉えられる。また、R G 005堀跡は第3・4・14・78次調査で確認されているのみで、第3次調査では南南東へ、第4次調査では西に延びることが確認されている。第3次調査から南南東に位置する第80次調査ではR G 005堀跡は確認できず、延長部分については今後の調査の蓄積を待ちたい。

第79次調査 奈良時代のR A 670竪穴建物跡を検出し、規模は約3.5m×4.3mの方形プランで、4口の支柱穴がある。カマドの煙道を基とする建物の主軸は、真北から西に約30°傾いており、カマドは建物の北西壁中央に構築されている。北西カマドは台太郎遺跡で確認されている奈良時代の竪穴建物跡に共通しており、北東～南カマドも僅かにあるが大多数は北西カマドである。R A 670竪穴建物跡の年代は出土遺物から8世紀後葉と考えられる。この建物跡で特筆すべきは、埋設土器2基である。建物北東隅に体部下半～底部を意図的に打ち欠いた土師器甕を2基とも床面構築土を掘り込み、正立の状態で埋設している。水甕として須恵器大甕を埋設する事例はあるものの、底部を欠損した土師器甕を埋設する目的や用途は不明で、稀な事例であるといえる。

Ⅲ 大宮北遺跡（第17次調査）

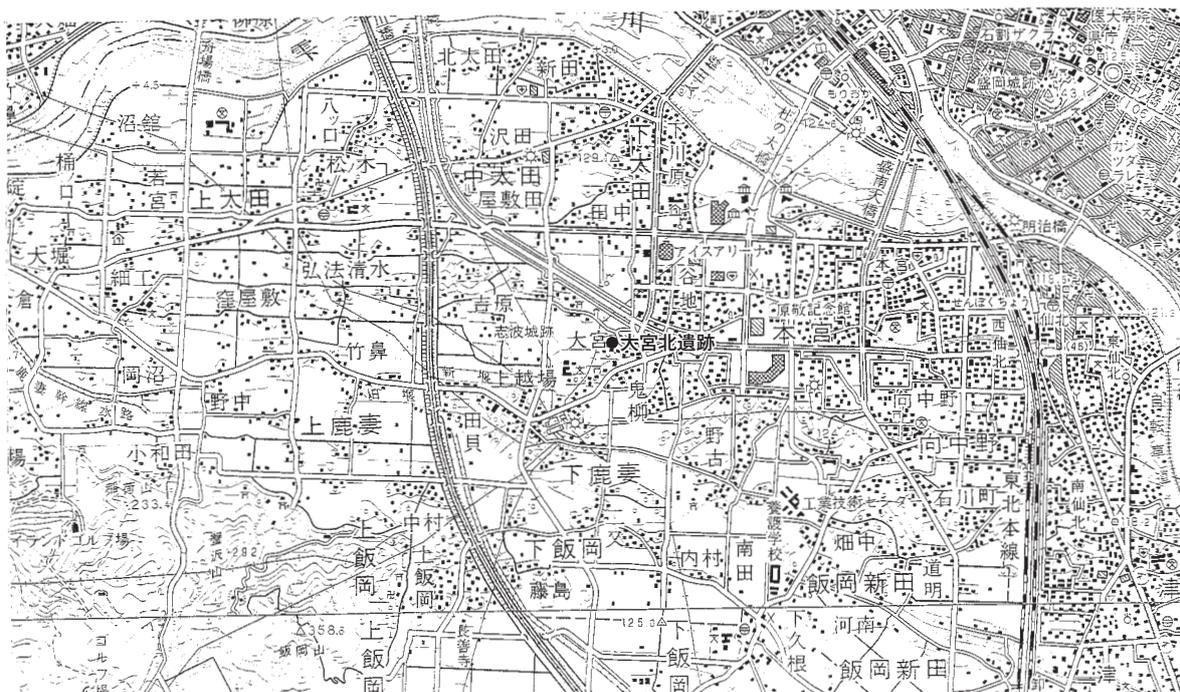
1. 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 大宮北遺跡は、JR盛岡駅から南西に約2.4kmの本宮字小幅・大宮地内に所在する（第10図）。

遺跡の東側は盛南開発に係る土地区画整理事業のため、急速に宅地化が進められている。遺跡の範囲は東西約530m、南北約240mと推定され、標高は126m前後である。現況は宅地、畑及び果樹園である（第11図）。

地形・地質 雫石川は奥羽山脈より東流し、その流れは烏泊山と箱ヶ森に挟まれた北の浦（市内上太田）で急激に挟められ、その狭窄部を抜けて北上川と合流する。雫石川はこれまでに何度も流路を変えており、雫石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりでなく、微高地上にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない雫石川の下刻が周辺山地からもたらす砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。雫石川の旧河道は幾筋も確認されており、大きなものは4条、そのほかにも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。それらに画された微高地上に古代を中心とした遺跡が点在している。大宮北遺跡もその沖積段丘上に立地している（第1図）。本遺跡の北部は、雫石川の旧河道と考えられる2mほどの段丘によって画され、北部以外は1m前後の比高差が確認でき、周辺の遺跡と画されている。



第10図 大宮北遺跡の位置（1：50,000）

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の立地する沖積段丘上では、縄文時代～古墳時代にかけての遺構遺物の発見は少なく、遺跡のほとんどは7世紀中葉以降の集落遺跡といえる。本遺跡の周辺には古代から中世にかけての遺跡が多く分布している。北東に小幅遺跡，宮沢遺跡，東に鬼柳A遺跡，南東には大宮遺跡，北西には林崎遺跡，そして西約250mには延暦22年（803）に造営された国指定史跡志波城跡が立地し，各遺跡は旧河道によって画されている。本遺跡に隣接する小幅遺跡，宮沢遺跡では9世紀後半～10世紀の竪穴建物跡を主体とした集落，近世の建物跡が確認されている。林崎遺跡は志波城跡の北東に位置し，9世紀後半の竪穴建物跡，コ字状に配置された10世紀前半～半ばの掘立柱建物跡とそれを囲むように配置された板塀跡が確認されている。規模の大きな官衙的な掘立柱建物を計画的に配置していることや，竪穴建物跡から「寺」と書かれた墨書土器や多嘴瓶，灯明皿に使われたあかやき土器坏など，宗教的な遺物が出土することから一般的な集落と異なり，宗教的な意味合いが強い，地域を支配した在地有力者の拠点と考えられる。隣接する大宮遺跡の大溝跡からは，12世紀末～13世紀初頭に位置づけられるかわらけが多量に出土している。

2. 調査内容

(1) これまでの調査

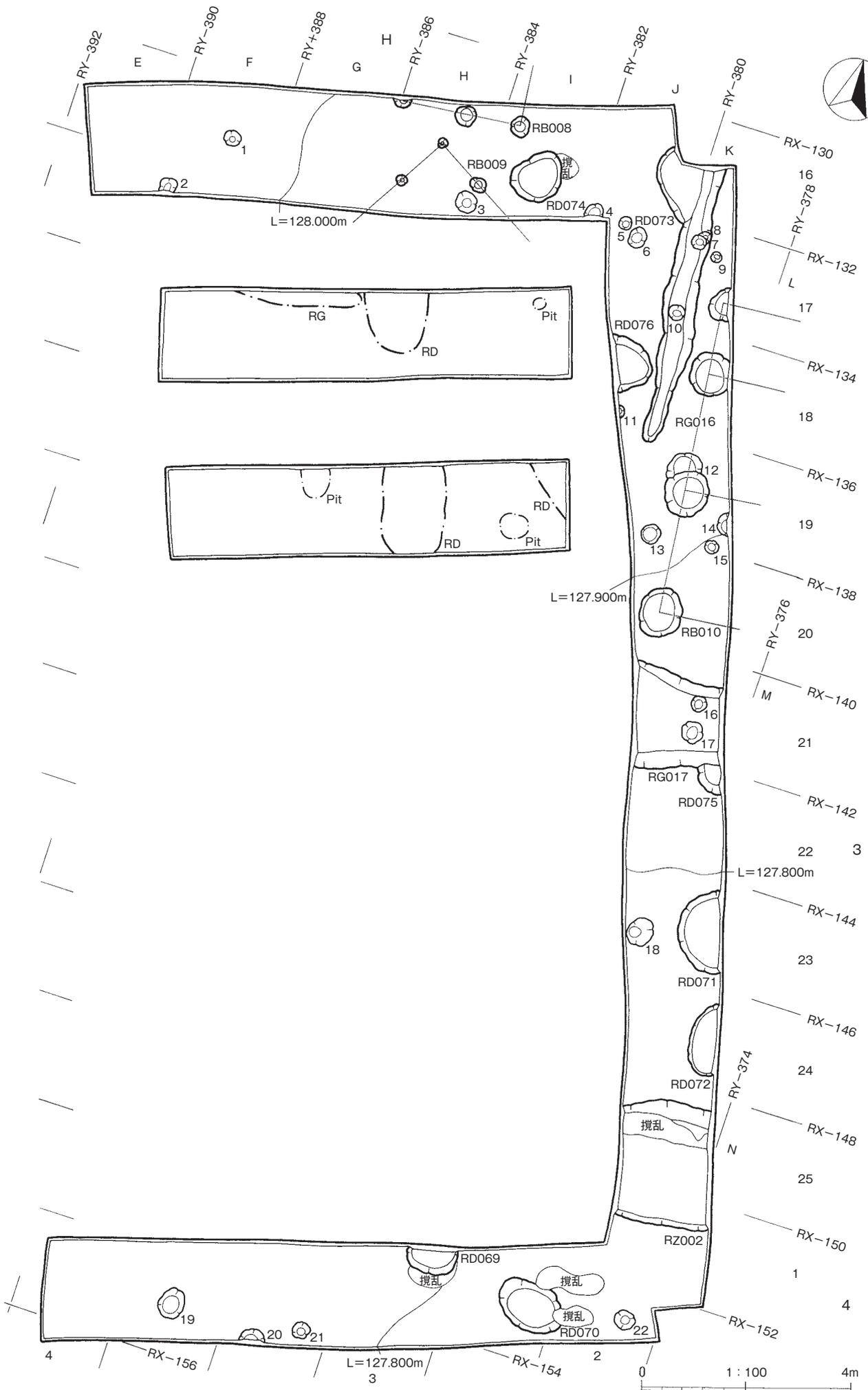
本遺跡は，昭和59年度に第1次調査が実施され，個人住宅建築や上下水道管敷設，平成5年度からは盛南開発に伴う発掘調査が主体を占め，以後平成25年度で17次にわたって調査されている。これまでの県埋文センター・市教委の発掘調査により，遺跡北部段丘縁には古代の集落，東部には近世～近代にかけての墓地が確認されている。第4次調査では，平安時代の竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑，溝跡，第8次調査では建て替えの認められる掘立柱建物跡や土坑が検出され，10世紀後葉に位置づけられるあかやき土器等が多数出土している。第9次調査では近世～近代の土坑墓が60基確認されており，江戸時代や明治期の村絵図から当該地は宮澤寺の墓地であることが判明している。第11・13・15次調査では区画溝と考えられる溝跡1条が確認され，埋土から10世紀中葉に位置づけられるあかやき土器が出土している。また第15次調査では，古墳時代末（7世紀後半）の竪穴建物跡1棟が確認されている。

次数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期 間	検出遺構・遺物	調査主体
1	本宮字小幡 4-5	農作業小屋建築	22	1984.5.9-5.15	平安時代土坑 8, ビット 4	市教委
2 試掘	本宮字大宮 61-5	住宅改築	120	1986.11.17-11.18	遺構・遺物なし	市教委
3 試掘	本宮字大宮 98-4	個人住宅建築	41	1993.7.13	遺構・遺物なし	市教委
4	本宮字小幡 13-1 外	盛南開発	3,900	1996.4.5-5.24	平安時代竪穴建物跡 2, 竪穴跡 2, 土坑 6 ほか	県埋文
5	本宮字小幡 98-4, 97-4	下水管理設	788	1998.9.1-9.7	平安時代溝跡 4, ビット	市教委
6 試掘	本宮字小幡 16-3	盛南開発	120	1999.11.17	遺構・遺物なし	市教委
7 試掘	本宮字小幡 16-4	盛南開発	252	2000.5.23	遺構・遺物なし	市教委
8	本宮字小幡 1-3	個人住宅建築	500	2000.6.2-7.10	平安時代掘立柱建物跡 7, 土坑 2, 溝跡 1 ほか	市教委
9	本宮字小幡 18-1, 18-3	盛南開発	792	2000.5.23-6.1	近世～近代土坑墓 60	市教委
10	本宮字小幡 16-7, 16-20, 18-4	盛南開発	440	2001.4.23-4.24	遺構なし，土師器片出土	市教委
11	本宮字小幡 5-1	個人住宅等建築	1,009	2007.4.11-4.24	平安時代溝跡 1	市教委
12 試掘	本宮字大宮 60-19	個人住宅建築	213	2007.5.24	遺構・遺物なし	市教委
13	本宮字大宮 98-4 外	下水管理設	16	2007.5.28	平安時代溝跡 1	市教委
14 試掘	本宮字大宮 153	農業施設建設	126	2007.7.17	遺構・遺物なし	市教委
15	本宮字小幡 3-3	県道建設	2,000	2009.6.1-6.30	古墳時代竪穴建物跡 1, 平安時代溝跡 1	県埋文
16 試掘	本宮字小幡 2-1	駐車場建設	244	2009.5.19	平安時代掘立柱建物跡 1, 土坑 7 ほか	市教委
17	本宮字小幡 4-1 の一部	個人住宅等建築	119	2013.6.24-7.3	平安時代掘立柱建物跡 3, 土坑 11 ほか	市教委

第4表 大宮北遺跡調査成果



第11図 大宮北遺跡全体図



第 12 図 大宮北遺跡第 17 次調査全体図

(2) 平成 25 年度の調査

大宮北遺跡における平成 25 年度の発掘調査は、国庫補助事業として実施した第 17 次調査で、個人住宅新築工事及び擁壁設置工事に伴う調査である。住宅建築予定地は擁壁設置によって盛土する計画のため、住宅及び擁壁範囲について確認調査を実施した。その結果、いずれからも遺構・遺物が確認されたため、申請者及び住宅メーカーと協議を行い、住宅部分については、基礎工事の掘削深度が盛土中で収まることを確認し保存措置とした。また工事によって遺構が損なわれる擁壁設置範囲については、本調査を実施した。

位 置 第 17 次調査区は、大宮北遺跡の中央北部に位置し、第 3・5 次調査区の東、第 8 次調査区の南に隣接する。また少し離れて南には第 1 次調査区が位置する（第 11 図）。調査区は畑地として使われており、耕作による削平・攪乱を受けている。調査区内は北西から南東方向に緩やかに傾斜する地形で、検出面の標高値は北西隅で 128.000m、南東隅で 127.800m である。

基本層序 調査区内で確認された基本層序は以下の I～IV 層に大別される。I a 層は耕作土であかやき土器小破片を含む。II a 層は粒～小塊状の暗褐色土を含む黒褐色土層で、微量の焼土・カーボン粒と少量のあかやき土器破片を含み、耕作によって攪乱・削平を受けている。III 層は褐～黄褐色シルト層（地山）で、その上面が遺構検出面である。これより下部は低位段丘を構成する砂礫層（IV 層）となり、調査区北で確認された遺構の底面等で確認しているが、それより南では遺構底面等から確認できず、場所により III 層の層厚に違いがあることがいえる。

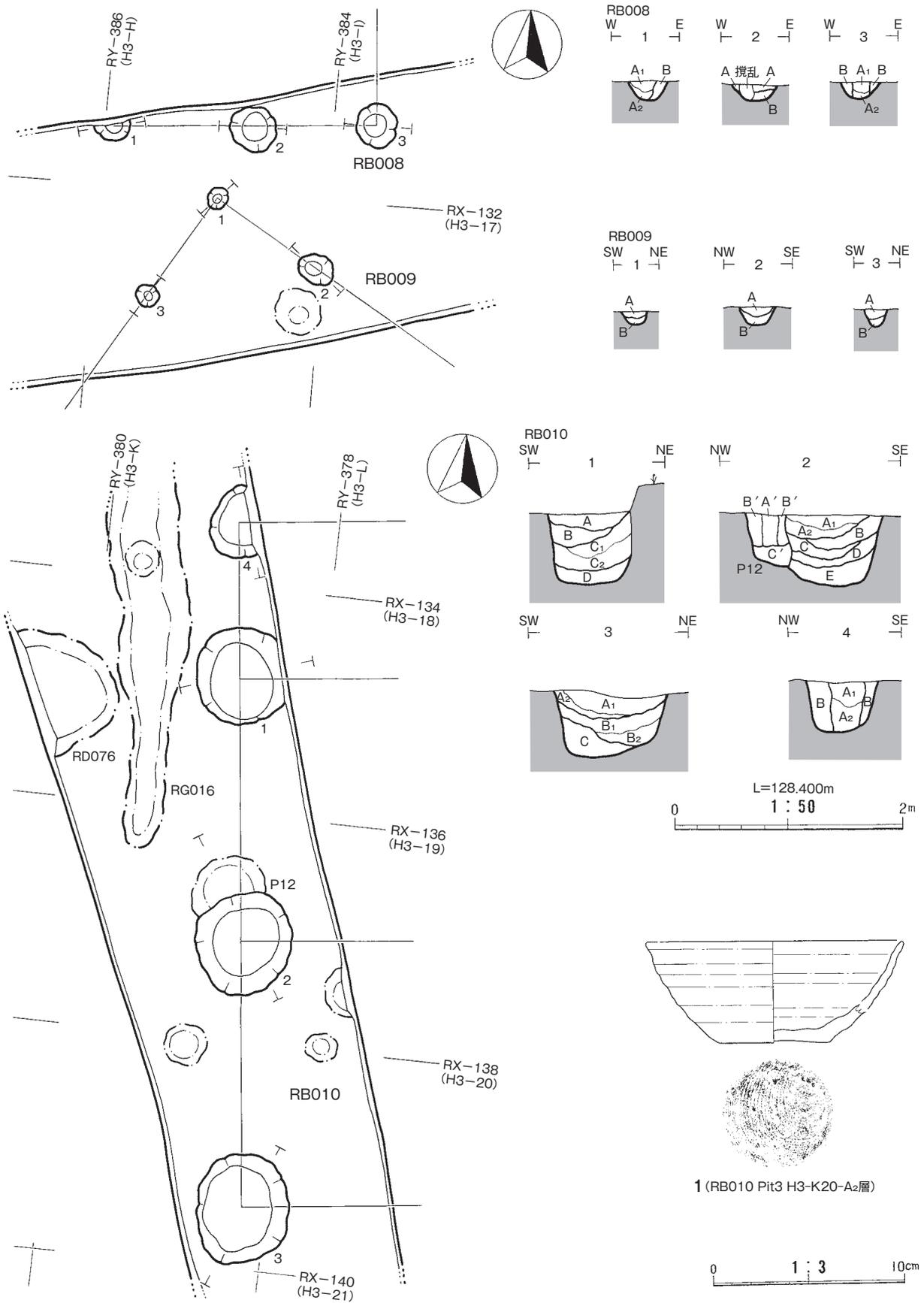
検出状況 II a 層を除去した III 層上面で検出作業が行われ、古代の掘立柱建物跡 3 棟、土坑 11 基、溝跡 3 条、
検出遺構 土器廃棄遺構 1 基、ピット 25 口が確認された。このうち精査した遺構は、擁壁設置範囲で確認された平安時代の掘立柱建物跡 3 棟（R B 008・009・010）、土坑 8 基（R D 069～076）、溝跡 2 条（R G 016・017）、あかやき土器等が多量に廃棄された土器廃棄遺構 1 基（R Z 002）、古代以降のピット 22 口である（第 12 図）。

出土遺物の時代・時期は、平安時代（10 世紀中葉～後葉）にかけてのあかやき土器、土師器が主体で微量であるが須恵器も含まれる。遺物総数は収納コンテナ（54cm×34cm×15cm）2 箱分で、その大半は R Z 002 土器廃棄遺構から出土している。

古代の遺構・遺物

R B 0 0 8 掘立柱建物跡（第 13 図）

位 置 調査区北西（H 3 - H・I 16 区）
平 面 形 桁行または梁行 2 間以上、桁行または梁行 1 間以上（調査区外）
棟 方 向 - 重複関係 なし
規 模 桁行または梁行 2 間以上（総長 2.30m 以上・7 尺 6 寸以上）、桁行または梁行 1 間以上
掘 込 面 削平 検 出 面 III 層上面
柱間寸法 南東隅の一部を確認し、P 1～3 の 3 口で構成される。東西側柱筋の柱間は P 1・P 2 間 - 1.24 m（4 尺 1 寸）、P 2・P 3 間 - 1.06m（3 尺 5 寸）である。



第13図 図RB008・009・010掘立柱建物跡，RB010掘立柱建物跡出土土器

柱 穴 各柱穴の規模・深さはP 1 - 径0.33m, 深さ0.18m, P 2 - 径0.40~0.43m, 深さ0.15m, P 3 - 径0.35~0.40mである。明確な柱痕跡を確認できたのは, P 1・3である。P 1の柱痕跡径は0.10~0.20m, P 3は0.15mをはかる。柱痕跡埋土は黒褐色土を主体に暗褐色土や黄褐色シルトを少量含み, 軟らかい。掘方埋土は明黄褐色シルトを主体に小塊状の黒褐色土を含み, しまりがある。平面形の多くが不整円形を呈する。

出土遺物 図示していないが, P 2・3からあかやき土器坏, 内面が黒色処理された土師器坏の小破片がそれぞれ出土している。

時 期 10世紀

RB009 掘立柱建物跡 (第13図)

位 置 調査区北西 (H 3 - H・I 17区) 平面形 桁行・梁行1間以上 (調査区外)

棟 方 向 - 重複関係 なし

規 模 桁行・梁行1間以上 (総長1.90m以上・6尺3寸)

掘 込 面 削平 検出面 III層上面

柱間寸法 身舎北西隅の一部を確認し, P 1~3の3口で構成される。桁間もしくは梁間柱間はP 1・P 2間-1.05m (3尺5寸), P 2・P 3間-1.05m (3尺5寸)である。

柱 穴 明確な柱痕跡を確認できたものはない。各柱穴の規模・深さはP 1 - 径0.17~0.20m, 深さ0.11m, P 2 - 径0.25~0.34m, 深さ0.17m, P 3 - 径0.20m, 深さ0.16mである。平面形は不整円形を呈する。埋土はA・B層に大別され, A層は粉~粒状の暗褐色土を少量含む黒褐色土で, B層は暗褐色土を主体とし, にぶい黄褐色シルトを微量含む層である。

出土遺物 図示していないが, P 1~3からあかやき土器坏の破片が出土している。

時 期 10世紀

RB010 掘立柱建物跡 (第13図)

位 置 調査区北東 (H 3 - K 17~20区)

平面形 身舎は桁行1間以上×梁行2間の東西棟で, 身舎北面に庇 (または縁) が付く (調査区外)。

棟 方 向 E 7° S 重複関係 グリッドピットP 12を切る。

規 模 桁行1間以上, 梁行2間 (総長4.80m・16尺)

掘 込 面 削平 検出面 III層上面

柱間寸法 身舎西側の一部を確認し, P 1~3で構成される。桁行西側柱筋は総長4.80m (16尺)で, 梁間柱間はP 1・P 2間-2.40m (8尺), P 2・P 3間-2.40m (8尺)である。庇の柱間はP 1・P 4間-1.36m (4尺5寸)である。

柱 穴 身舎の各柱穴の規模・深さはP 1 - 径0.85m, 深さ0.62m, P 2 - 径0.85~0.95m, 深さ0.64m, P 3 - 径0.80~1.00m, 深さ0.60mである。平面形は不整円形を呈する。身舎の柱穴で明確な柱痕跡を確認できたものはない。埋土はA~E層に大別され, 黒色土や黒褐色土を主体とし, 粒~塊状の暗褐色土やにぶい黄褐色シルトを含む層である。A層には微量の焼土粒と少量のカーボン粒~小塊状を含み, いずれの層も礫または砂礫を含む。

庇の柱穴の規模・深さは, 身舎の柱穴と比べて若干小規模でP 4 - 径0.63m, 深さ0.45mであ

る。平面形は不整楕円径である。柱痕跡が確認でき、柱痕跡径は0.21～0.32mをはかる。柱痕跡埋土は黒褐色土を主体に粒状の暗褐色土やにぶい黄褐色シルトを少量含む。掘方埋土は黄褐色シルトを主体に塊状の黒褐色土を含み、しまりがある。

出土遺物(第13図1) 1はあかやき土器坏で、底部は回転糸切無調整である。胎土に雲母が少量混入している。内外面に焼け弾けや剥離が確認される。その他、あかやき土器坏、内面が黒色処理された土師器坏の破片が出土している。

時期 10世紀後葉

RD069土坑(第14図)

位置 調査区南(H4-K2区) 平面形 不整形(調査区外)

規模 長軸-上端0.95m, 下端0.82m, 短軸-上端0.51m以上, 下端0.37m以上

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 III層上面

埋土 人為堆積でA～F層に大別され、A・C層は2層に、B層は3層に細分される。

A層-明黄褐色シルトと褐色シルトの混合土で、小塊状の黒褐色土を微量含む。A₂層の方が黒褐色土の割合が若干高い。

B層-粒～塊状の黄褐色シルトを含む黒色土。下層ほど黄褐色シルトの割合が高くなる。

C層-黄褐色シルトを主体とし、塊状の黒褐色土を多量含む。C₂層の方が黒褐色土の割合が高い。

D層-黄褐色シルトと暗褐色土の混合土で、小塊状の黒色土を微量含む。

E層-黒褐色土を主体とし、塊状の黄褐色シルトを多量含む。

F層-粒状の黄褐色シルトを僅かに含む、黒色土と暗褐色土の混合土。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.81mで、直立気味に外傾して立ち上がる。

底の状態 ほぼ平坦である。 出土遺物 なし 時期 平安時代

RD070土坑(第14図)

位置 調査区南(H4-L2区) 平面形 不整楕円形

規模 長軸-上端1.37m, 下端0.96m, 短軸-上端0.88m, 下端0.65m

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 III層上面

埋土 自然堆積でA～B層に大別され、B層はさらに2層に細分される。

A層-暗褐色土と褐色シルトの混合土で、塊状のにぶい黄橙色シルトを少量含む。粒～塊状の焼土・カーボン、あかやき土器破片を多く含む。

B層-暗褐色土を主体とし、粒～塊状のにぶい黄褐色シルトを含む。A₁層は黄褐色シルトの割合が高く、少量のカーボン粒、あかやき土器破片を含む。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.18mで、外傾して立ち上がる。

底の状態 中央がやや深くなる。

出土遺物(第16図1～2) 1は土師器の坏で、底面を欠損している。内面には小単位の細かなヘラナデ調整を施し、胎土に雲母を少量含む。2はあかやき土器坏(もしくは埴)の体部～底部で、胎土に少量の雲母を含み、底部は回転糸切無調整である。

時期 10世紀中葉

RD071 土坑 (第 14 図)

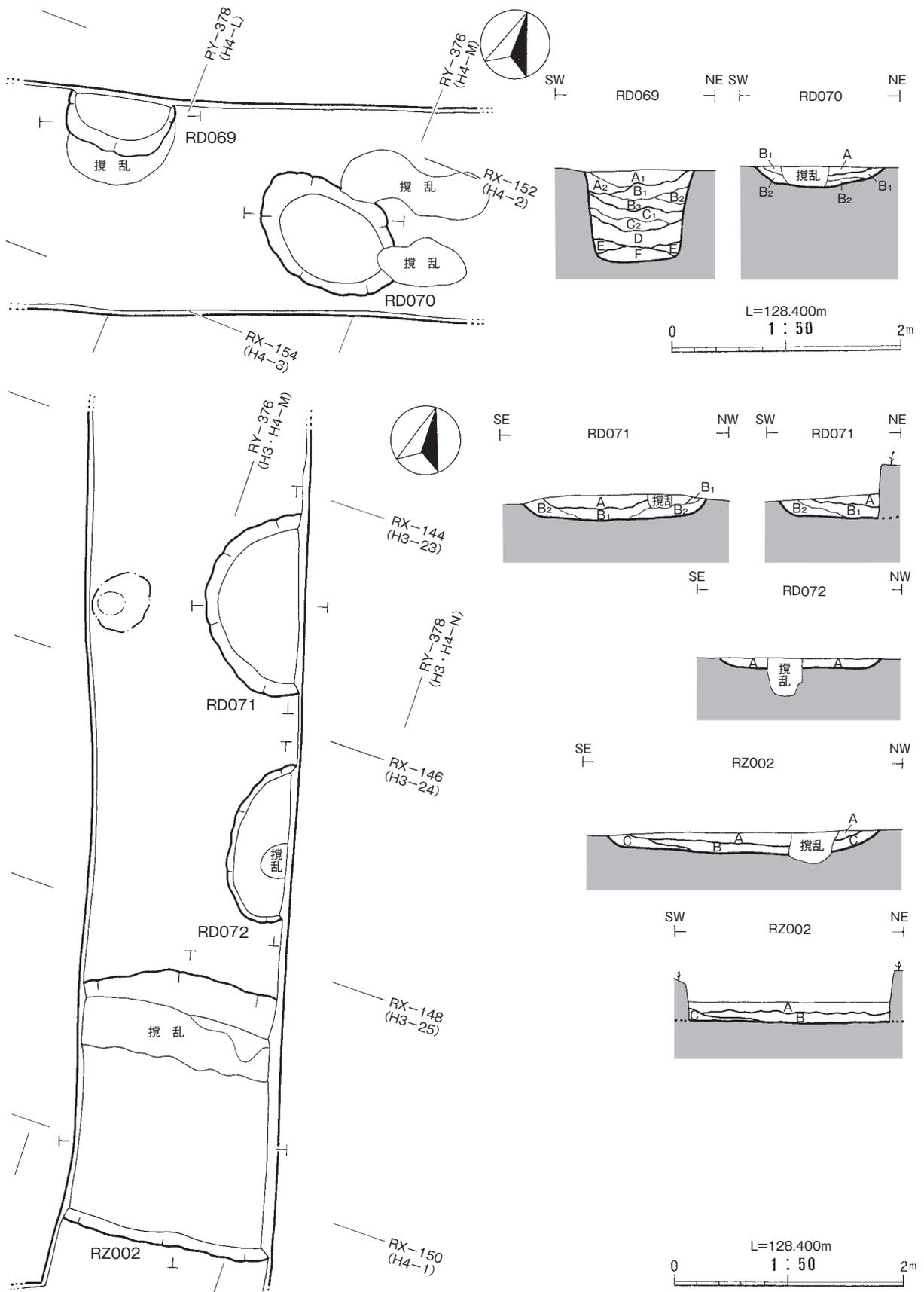
位置	調査区東 (H 3 - M 23 区) 平面形 不整円形 (調査区外)
規模	長軸 - 上端 1.60m, 下端 1.35m, 短軸 - 上端 0.82m 以上, 下端 0.70m 以上
重複関係	なし 掘込面 削平 検出面 III 層上面
埋土	自然堆積で A ~ B 層に大別され, B 層はさらに 2 層に細分される。 A 層 - におい黄褐色シルトと黒褐色土の混合土で, 粒 ~ 小塊状の暗褐色土を微量含む。粉 ~ 粒状の灰白色火山灰を少量含む。 B 層 - 塊状の黄褐色シルトを少量含む, 黒褐色土と暗褐色土の混合土。B ₁ 層の方が黄褐色シルトの割合が高い。あかやき土器坏破片と少量の土師器坏破片を含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.23m で, 外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	B 層からあかやき土器坏破片, 内面が黒色処理された土師器坏の小破片が出土している。
時期	10 世紀前葉

RD072 土坑 (第 14 図)

位置	調査区東 (H 3 - M 24 区) 平面形 不整楕円形 (調査区外)
規模	長軸 - 上端 1.38m, 下端 1.26m, 短軸 - 上端 0.51m 以上, 下端 0.45m 以上
重複関係	なし 掘込面 削平 検出面 III 層上面
埋土	自然堆積で, 暗褐色土と黒褐色土の混合土で, 粉 ~ 粒状の黄褐色シルトを微量含む単層である。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.10m で, 外傾して立ち上がる。
底の状態	ほぼ平坦である。
出土遺物	あかやき土器坏破片, 僅かに土師器坏・甕の小破片が出土している。
時期	10 世紀

RD073 土坑 (第 15 図)

位置	調査区北 (H 3 - J16 区) 平面形 不整楕円形 (調査区外)
規模	長軸 - 上端 1.13m 以上, 下端 1.02m 以上, 残存部短軸 - 上端 0.80m, 下端 0.75m
重複関係	R G 016 に切られる。掘込面 削平 検出面 III 層上面
埋土	自然堆積で A ~ B 層に大別され, A 層はさらに 2 層に細分される。 A 層 - 黒褐色土を主体とし, 塊状の黄褐色シルトを含む。A ₂ 層の方が黄褐色シルトの割合が非常に高い。 B 層 - 褐色シルトを主体とし, 粒状の暗褐色土を少量含む。
壁の状態	検出面から底面までの深さは 0.16m で, 外傾して立ち上がる。
底の状態	西側が若干深くなるが, ほぼ平坦である。
出土遺物	A 層から少量のあかやき土器坏破片, B 層からあかやき土器坏, 内面黒色処理の土師器坏・高台付坏の小破片が出土している。
時期	10 世紀



第 14 図 RD 069 ~ 072 土坑, R Z 002 土器廃棄遺構

RD074土坑 (第15図)

位置	調査区北西 (H3-I 16・17区)	平面形	不整楕円形
規模	長軸-上端 1.05m, 下端 0.79m, 短軸-上端 0.82m, 下端 0.66m		
重複関係	なし	掘込面	削平 検出面 III層上面
埋土	自然堆積でA~B層に大別され, A層はさらに2層に細分される。 A層-黒色土を主体とし, 黄褐色シルトを含む。混入土の黄褐色シルトについて, A ₁ 層は微量の粉~粒状, A ₂ 層は多量の粒~塊状である。 B層-にぶい黄褐色シルトを主体とし, 塊状の暗褐色土を少量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.15mで, 外傾して立ち上がる。底の状態 ほぼ平坦である。		
出土遺物	A ₁ 層からあかやき土器坏の破片とともに, 僅かであるが内面黒色処理の土師器高台付坏の小破片が出土している。		
時期	10世紀		

RD075土坑 (第15図)

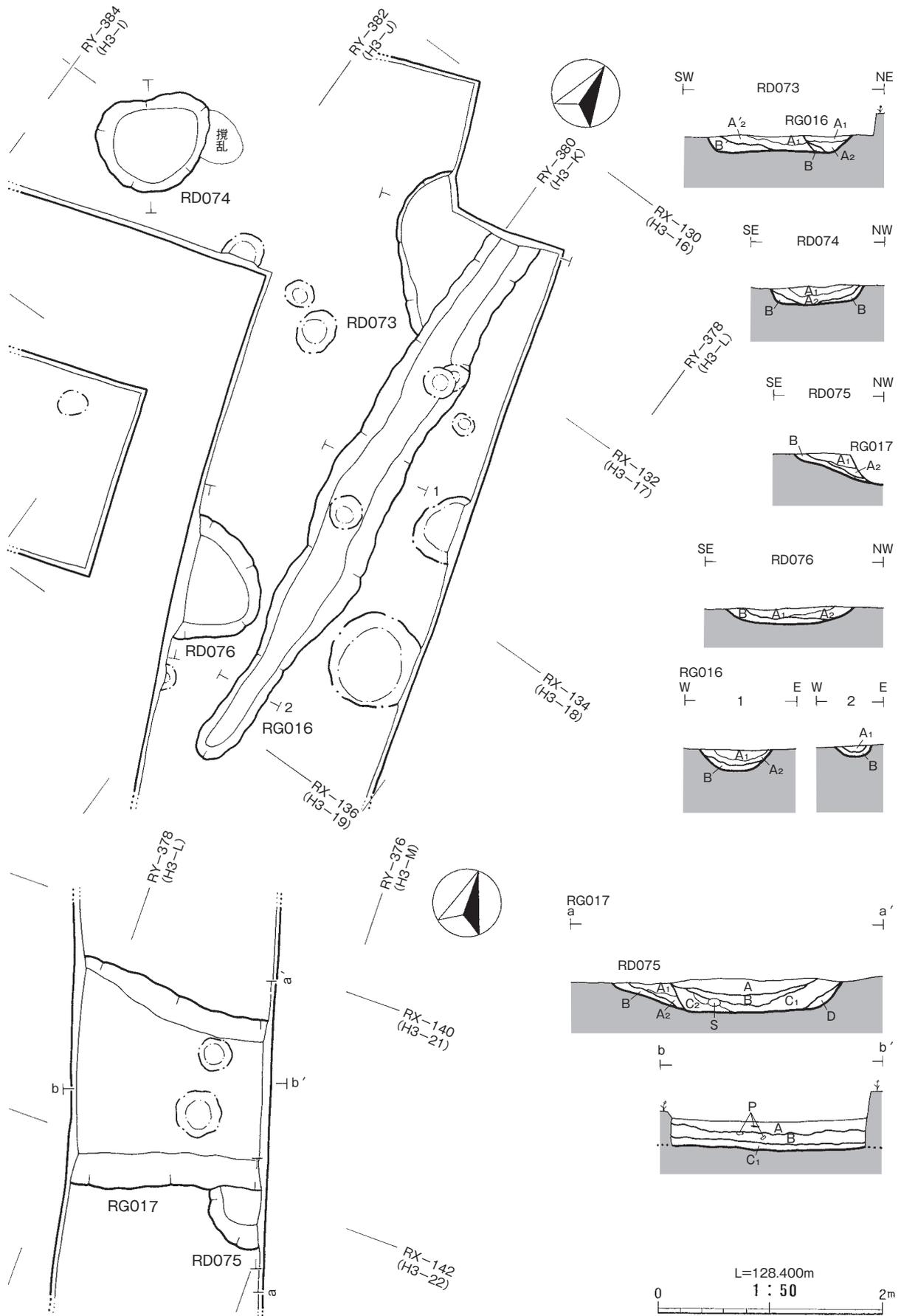
位置	調査区北東 (H3-L 22区)	平面形	不整楕円形 (調査区外)
規模	残存部長軸-上端 0.55m, 下端 0.33m, 短軸-上端 0.45m以上, 下端 0.33m以上		
重複関係	RG 017に切られる。	掘込面	削平 検出面 III層上面
埋土	自然堆積でA~B層に大別され, A層はさらに2層に細分される。 A層-黒褐色土を主体とし, 粉~粒状の暗褐色土を含む。A ₁ 層は暗褐色土の割合が高い。 B層-暗褐色土と黒褐色土の混合土で, 粒~小塊状のにぶい黄褐色シルトを微量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.20mで, 緩やかに外傾して立ち上がる。底の状態 -		
出土遺物	A層からあかやき土器坏の破片, 僅かに内面黒色処理の土師器坏の小破片が出土している。		
時期	10世紀		

RD076土坑 (第15図)

位置	調査区北 (H3-J18区)	平面形	不整楕円形 (調査区外)
規模	長軸-上端 1.14m, 下端 0.78m, 短軸-上端 0.66m以上, 下端 0.56m以上		
重複関係	なし	掘込面	削平 検出面 III層上面
埋土	自然堆積でA~B層に大別され, A層はさらに2層に細分される。 A層-黒色土を主体とし, 粒~塊状の暗褐色土を含む。A ₂ 層は暗褐色土の割合が高い。 B層-暗褐色土を主体とし, 粒~小塊状の褐色シルトを少量含む。		
壁の状態	検出面から底面までの深さは0.16mで, 緩やかに外傾して立ち上がる。		
底の状態	ほぼ平坦である。	出土遺物	なし 時期 平安時代

RG016溝跡 (第15図)

位置	調査区南 (H3-K 16~19区)
平面形	南北方向にほぼ直線状にのびる (調査区外)。
規模	総延長 5.40m以上, 上端幅- 0.29~0.65m, 下端幅- 0.16~0.35m



第15図 RD073~076土坑, RG016・017溝跡

重複関係 RD 073 を切る。 掘込面 削平 検出面 III層上面

埋土 自然堆積でA・B層に大別され、A層はさらに2層に細分される。
 A層-黒色土を主体とする層で、A₁層は粉～粒状の褐色シルトを微量含み、A₂層は少量の礫と粒～小塊状の黄褐色シルトを多量含む。
 B層-暗褐色土と褐色シルトの混合土で、粒状の黒褐色土を微量含む。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.10～0.19mで、外傾して立ち上がる。

底の状態 南から北に向かって徐々に深くなるが、検出した中央部分から北に向かって浅くなる。

出土遺物(第16図3) 3はあかやき土器坏(もしくは埴)の体部～底部で、底部は回転糸切無調整、胎土に雲母を含む。このほか、図示していないが、あかやき土器坏・高台付坏、少量の土師器坏、僅かにあかやき土器甕の各破片が出土している。

時期 10世紀後葉

RG017溝跡(第15図)

位置 調査区北東(H3-K・L21・22区)

平面形 東西方向にほぼ直線状にのびる(調査区外)。

規模 総延長1.73m以上、上端幅-1.57～2.04m、下端幅-1.05～1.67m

重複関係 RD 075 を切る。 掘込面 削平 検出面 III層上面

埋土 自然堆積でA～D層に大別され、C層はさらに2層に細分される。
 A層-暗褐色土と褐色シルトの混合土で、粒状の黒褐色土を微量含む。あかやき土器破片を多量に含む。
 B層-黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の暗褐色土を多量含む。
 C層-暗褐色土と黒色土の混合土で、小塊状の黄褐色シルトを微量含み、拳大の礫を少量含む。
 C₂層は黄褐色シルトの割合が高い。
 D層-褐色シルトを主体とし、粒～塊状の黒褐色土を多く含む。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.31mで、外傾して立ち上がる。

底の状態 ほぼ平坦である。

出土遺物(第16図4～6) 4はあかやき土器高台付坏で、ほぼ完形である。口縁部が外反し、リング状の高台部を底部に接着する。底面に菊花文が認められる。5・6は土師器坏で、胎土に雲母を含む。5は底部が回転糸切無調整、内面が黒色処理され、細かいヘラミガキが施される。6は体部破片で、外面には墨書痕が認められ、内面は黒色処理が失われている。この他、多量のあかやき土器坏破片とともに、少量のあかやき土器甕、土師器甕及び須恵器長頸瓶の小破片が出土している。

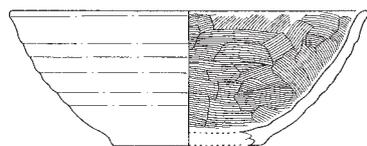
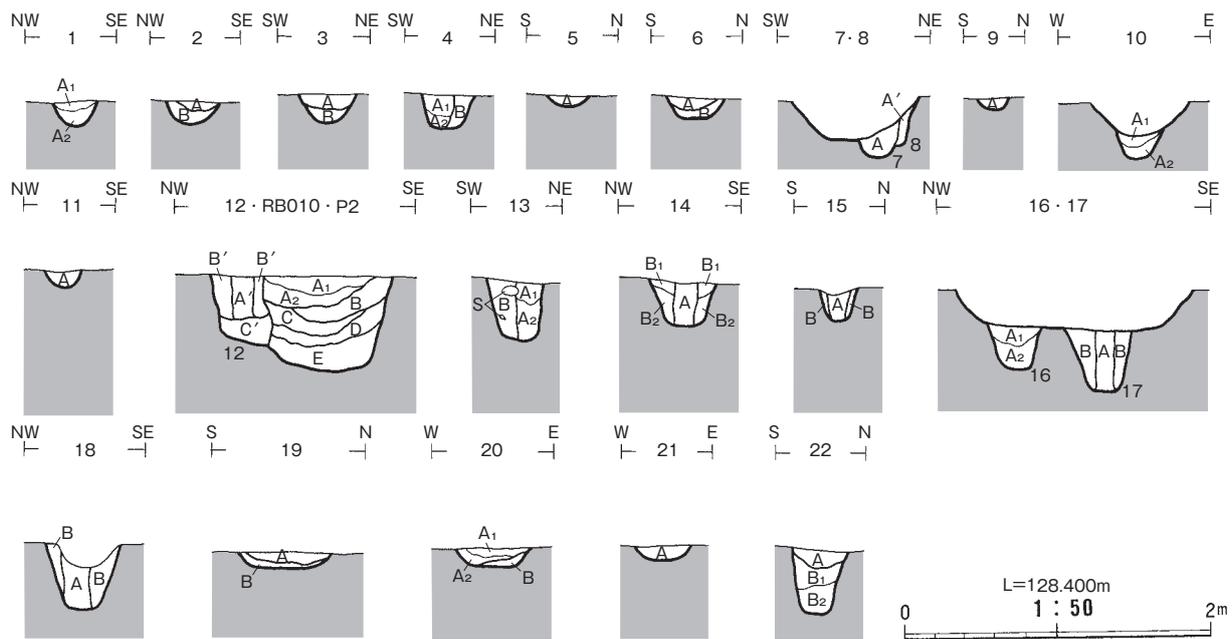
時期 10世紀中葉～後葉

RZ002土器廃棄遺構(第14図)

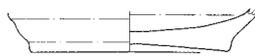
位置 調査区東(H3-M25区) 平面形 不整楕円形(調査区外)

規模 長軸-上端2.40m、下端1.92m、短軸-上端1.80m以上、下端1.63m以上

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 III層上面



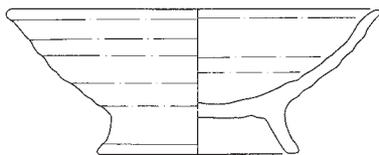
1 (RD070-H4-L2-B層)



2 (RD070-H4-L2-B層)



3 (RG016-H3-K17-A層)



4 (RG017-H3-L21-A層)



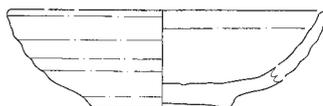
5 (RG017-H3-L21-A層)



6 (RG017-H3-L21-B層)



7 (RZ002-H4-M1-B層)



8 (RZ002-H3-M25-B層)



9 (RZ002-H3-M25-B層)



第16図 ピット土層断面，RD 070 土坑，RG 016・017 溝跡，RZ 002 土器廃棄遺構（1）出土土器

- 埋 土** 人為堆積でA～C層に大別される。あかやき土器破片を非常に多く含むが、上層ほど多い。
 A層－にぶい黄褐色シルトと暗褐色土の混合土で、粒状の黒褐色土を微量含む。焼土粒とカーボン粒を多量含む。
 B層－暗褐色土を主体とし、粒～小塊状の黄褐色シルトを少量含む。焼土粒とカーボン粒を少量含む。
 C層－明黄褐色シルトを主体とし、小塊状の黒褐色土を少量含む。
- 壁の状態** 検出面から底面までの深さは0.18mで、北側は緩やかに外傾して立ち上がる。
- 底の状態** ほほ平坦であるが、僅かに北に傾斜する。
- 出土遺物 (第16・17図7～27)** 埋土からはあかやき土器等の破片が遺物収納コンテナ1.5箱分(破片数4613点)出土しているが、その大半はあかやき土器坏・高台付坏である。その他は土師器坏(内外黒色処理含む)、若干のあかやき土器甕、土師器甕、須恵器甕・長頸瓶である。7～15はあかやき土器坏で、底部は回転糸切無調整である。7・8は口縁部付近に若干歪みがあり、10・11・13は器形に傾きと歪みが生じている。9・12以外は胎土に雲母を含む。16・17は土師器坏の底部である。16は内外の器面に黒色処理とヘラミガキが施される。17は底部が回転糸切無調整、内面に細かいヘラミガキが施される。18～25はあかやき土器高台付坏である。18は口縁部が外反し、リング状の高台部を底部に接着する。底面に菊花文が認められる。19～25は底部～高台部で、19～22は底面に菊花文が確認される。23は、高台の形状がリング状高台(19～22)と柱状高台(24・25)の間である。底面と高台の内面はロクロナデである。24・25は柱状高台で、切り離しは回転糸切である。高台部は外に張り出す形状である。26・27はあかやき土器小皿で、底部は回転糸切無調整である。26は口縁部がやや内湾し、27は外反する形状である。
- 時 期** 10世紀後葉

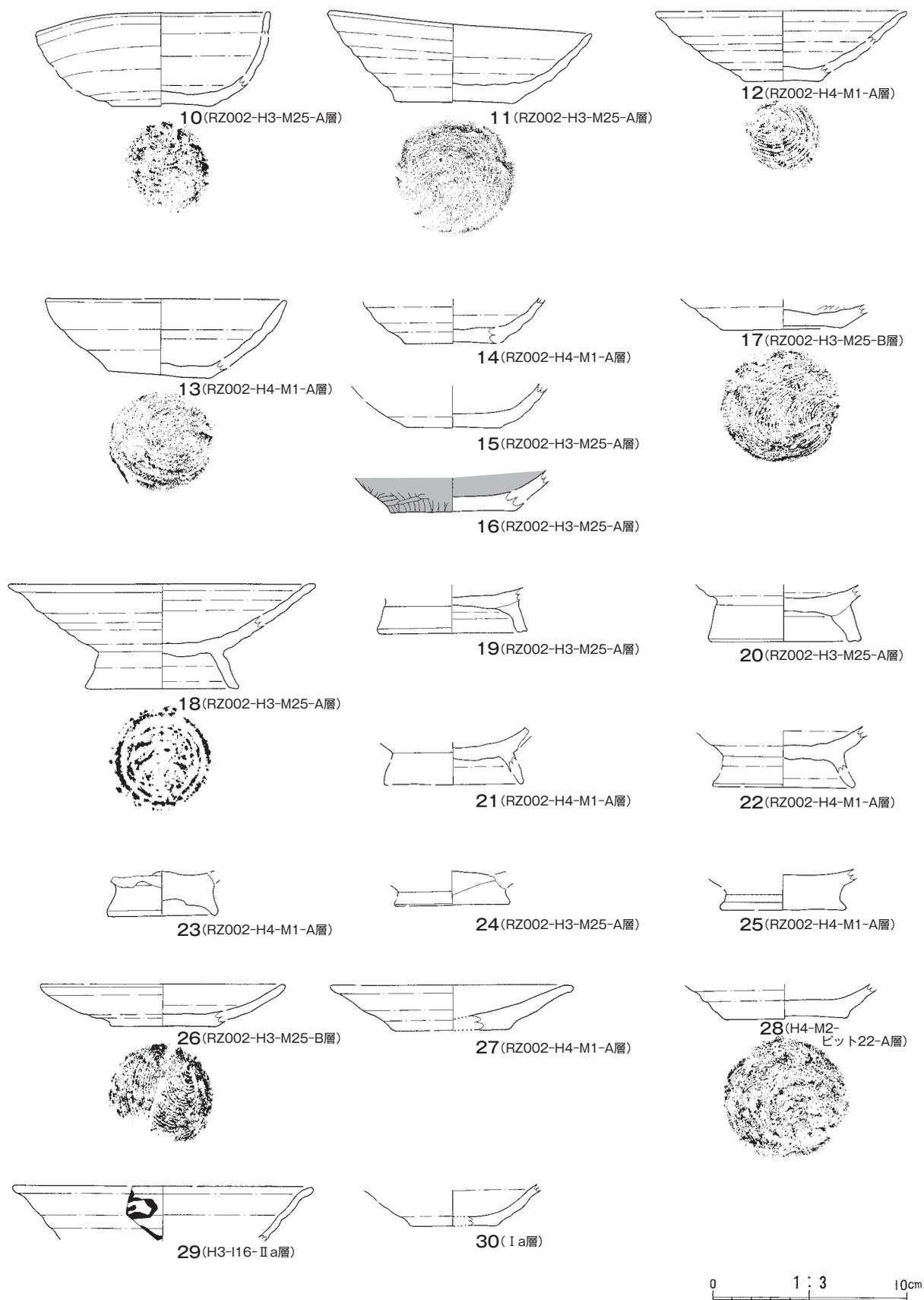
古代以降の遺構・遺物、遺構外遺物

ピット群(第12・16図)

調査区のほぼ全域から22口のピット(P1～22)が検出されている。検出面はⅢ層上面である。埋土は黒褐色土や暗褐色土が主体となるものが多い。柱痕跡が認められるピットはP4・12～15・17・18である。各ピットの規模及び検出面からの深さは以下のとおりである。

P1－径0.30～0.34m、深さ0.17m・P2－径0.30～0.38m、深さ0.15m・P3－径0.39～0.45m、深さ0.19m・
 P4－径0.35m、深さ0.23m・P5－径0.25m、深さ0.08m・P6－径0.32～0.40m、深さ0.15m・P7－径0.26～0.30m、深さ0.41m・P8－径0.23m、深さ0.33m・P9－径0.20m、深さ0.08m・P10－径0.31m、深さ0.37m・
 P11－径0.23m、深さ0.13m・P12－径0.70m、深さ0.46m・P13－径0.35～0.40m、深さ0.39m・P14－径0.45m、深さ0.29m・
 P15－径0.25～0.30m、深さ0.21m・P16－径0.30m、深さ0.55m・P17－径0.40～0.43m、深さ0.68m・
 P18－径0.45～0.55m、深さ0.44m・P19－径0.50～0.61m、深さ0.11m・P20－径0.50m、深さ0.12m・
 P21－径0.30～0.35m、深さ0.10m・P22－径0.36～0.42m、深さ0.43m

出土遺物 (第17図28) ピットから出土した遺物は須恵器、あかやき土器、土師器の小破片で磨滅しているものが多い。28はP22から出土したあかやき土器坏の底部で、底部回転糸切無調整、胎土に雲母を含む。



第 17 図 R Z 002 土器廃棄遺構 (2), 遺構外出土土器

遺構外遺物

調査区内で確認された基本層序はⅠ～Ⅳ層に大別される。Ⅰa層は耕作土であかやき土器を主体とする小破片を含み、Ⅱa層は粒～小塊状の暗褐色土を含む黒褐色土層で、微量の焼土・カーボン粒と土器破片を含む。各層に含まれるのは、あかやき土器、土師器が主体で、Ⅱa層は多くの破片を包含する。Ⅲ層は褐～黄褐色シルト層（地山）で、Ⅳ層は低位段丘を構成する砂礫層である。

出土遺物（第17図29・30） 29・30はあかやき土器坏である。29は体部下半～底部を欠損し、口縁部～体部外面に墨書文字が認められるが、判読不明である。30は口縁部～体部上半を欠損し、底部回転糸切無調整である。

（3） 調査のまとめ

今回の調査で精査した遺構は、擁壁設置範囲で確認された平安時代の掘立柱建物跡3棟（RB 008・009・010）、土坑8基（RD 069～076）、溝跡2条（RG 016・017）、あかやき土器等が多量に廃棄された土器廃棄遺構1基（RZ 002）、古代以降のピット22口である。

掘立柱建物跡 西辺が確認された大型のRB 010掘立柱建物跡は、身舎部分の桁行が不明であるが、東西棟で北面に庇もしくは縁が付き、北側の第8次調査で確認された大型掘立柱建物群と傾きがほぼ同じである。同じく南東部を確認したRB 008掘立柱建物跡も同様の傾きを持つ。RB 009掘立柱建物跡は掘方の規模や傾きが異なる。資料数が少ないが出土土器から年代を与えると、RB 008・009掘立柱建物跡は10世紀代、RB 010掘立柱建物跡は10世紀後葉と考えられる。同様な規模の大きな掘立柱建物群は、遺跡の北西部に立地する林崎遺跡でも確認され、10世紀中葉の掘立柱建物群とそれを取り囲む板塀が伴う。宗教的な遺物も確認され、一般的な集落と異なり、宗教的な意味合いが強い、地域を支配した在地有力者の拠点と考えられ、本遺跡で確認されている大型掘立柱建物群は林崎遺跡に後続するものと捉えられる。

土器廃棄遺構 第8次調査では、掘立柱建物跡周辺にあかやき土器破片が多量に出土する土坑が確認され、意図的に打ち欠いた破片もあるため、土器を廃棄したと考えている。あわせて、器種があかやき土器坏・高台付坏が大半を占めることから、何らかの儀式を行っていたと想定している。第17次調査でも同様な遺構が確認され、人為堆積の埋土からはあかやき土器等の破片が遺物収納コンテナ1.5箱分（破片数4,613点）出土し、その大半はあかやき土器坏・高台付坏である。出土遺物に完形品はなく、どれも細かく割れていることから意図的な廃棄行為を行ったと考えられ、土坑ではなくRZ 002土器廃棄遺構として精査・記録した。出土土器から遺構の年代は10世紀後葉と捉えられる。出土土器の器種と破片数は、あかやき土器坏・高台付坏4,159点・小皿3点で、その他は土師器坏405点、あかやき土器甕23点、土師器甕15点、須恵器甕・長頸瓶8点である。あかやき土器坏・高台付坏及び小皿の割合は全体の90.2%を占めており、一般的な集落で煮炊き用として使用する甕類の破片が極めて僅かしか出土しないことから、本遺跡の特殊性を挙げることができる。周囲の集落に見られない大型掘立柱建物群を有すること、その建物群周辺から出土する土器の器種に偏りがあり、あかやき土器坏・高台付坏などの儀式的な土器群が多量に出土していることから、本遺跡に先行する林崎遺跡とともに10世紀代から始まる新興在地有力者の拠点集落と想定される。

写真図版



台太郎遺跡第 78 次調査区全景（南から）



台太郎遺跡第 78 次調査区全景（東から）



台太郎遺跡第 78 次調査 R G 005 堀跡土層断面（東から）



台太郎遺跡第 78 次調査 R G 005 堀跡出土土師器球胴甕



台太郎遺跡第79次調査区全景（南から）



台太郎遺跡第79次調査区全景（西から）



台太郎遺跡第 79 次調査 R A 670 竪穴建物跡全景（南東から）



台太郎遺跡第 79 次調査 R A 670 竪穴建物跡出土土器



大宮北遺跡第 17 次調査区全景（北から）



大宮北遺跡第 17 次調査 R B 010 掘立柱建物跡全景（東から）



大宮北遺跡第 17 次調査 R Z 002 土器廃棄遺構全景（南から）



大宮北遺跡第 17 次調査 R Z 002 土器廃棄遺構出土土器

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	盛岡市内遺跡群							
副書名	平成24・25年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ番号								
編著者名	花井正香, 佐々木紀子, 津嶋知弘							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行機関	盛岡市教育委員会							
発行年月日	2014年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
だいたろういせき 台太郎遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 ひいなかの 向中野二丁目3	03201	LE16-2269	39°	141°	第78・79次 2013.06.12～21, 2013.07.04～24	第78次 55	個人住宅建築
				40′	08′		第79次 67	
おおみやきたいせき 大宮北遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 もとみやあごこほば 本宮字小幡4		LE16-2036	39°	141°	第17次 2013.06.24 ～ 2013.07.03	119	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
台太郎遺跡 第78次	集落	平安時代	堀跡	1条	土師器, あかやき土器, 須恵器			
台太郎遺跡 第79次		古代	溝跡	1条				
		奈良時代	竪穴建物跡	1棟	土師器			
		古代	土坑	1基				
要約	台太郎遺跡は大規模土地区画整理事業によって、遺跡西部から中央部が調査されており、古代の竪穴建物跡が約700棟確認される。北上川流域で最大規模の集落である。本調査では調査事例の少ない遺跡北東部の集落の様相を明らかにすることができた。							
大宮北遺跡 第17次	集落	平安時代	掘立柱建物跡	3棟	土師器, あかやき土器, 須恵器			
			土坑	11基				
			溝跡	3条				
			土器廃棄遺構	1基				
要約	大宮北遺跡は10世紀代から始まる新興在地有力者の拠点集落で、鎮守府胆沢城広域統治の末端を担ったと推定される。これまでの調査で10世紀後葉の大型掘立柱建物跡、祭祀・儀礼に使用された多量の土器を廃棄した遺構が確認されている。本調査でも同様の遺構・遺物が確認され、調査事例の少ない10世紀後葉の資料が蓄積された。							

盛岡市内遺跡群

—平成 24・25 年度発掘調査報告—

2014 年 9 月 30 日 発行

編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605

発行 盛岡市教育委員会

印刷 株式会社 富士屋印刷所
〒020-0841 岩手県盛岡市羽場 13 地割 30 番地 10
TEL 019-637-6391 (代) FAX 019-637-7990